問わない。たいそう力がある、(それ)でも、角力取にわ勝たれまい。敵軍を破る、(それ)のみならず、其大將まで生捕つた。春になつた、しかし、(ながら)まだ氣候わ寒い。

助詞

第一類の助詞

第一

助詞の順わ、すべて、頭の音の五十音順で列ねた。解釋の意味の、本書と稍違つて居る所もあるのわ、參考の爲に、舊案を記したのである。尙、本書に擧げなかつた助詞も擧げた、助詞の意味の、更に委しい區別も記して置く。

【三四八】 **か** 問をあらわすもの、

音のするのわ雨か。今來たのわ誰か。

おまえも行くか。どこに居るか。それでよいと思うか。

路わ遠いか。それに違いないか。

手紙が書かれるか。書物を讀んだか。もつと見たいか。取つたか、取らぬか。

見てか、見ないでか。行くのわ、どこまでか。聞いたわ、おまえばかりか。

必要からか、不必要からか。

○相手の心持を問う意味で、願の意味となるもの、

明日わ話にこないか。敎えてくれぬか。

「すこしか、たんとか。」昨日も來たのに、またか。「靜かか、賑やかか。」などゝ、副詞又わ副詞の語根にも附く。

【三四九】 か 反語となるもの、文語の「か」かも」かは」である。

それくらいで追付く話か。おまえ一人で出來る事か。羨ましがるまい事か。

すこしの金で、何が出來るか。なんで承知しようか。

嬉しいでわないか。おまえも見たでわないか。

そんな事があるものですか。

百圓どころか、千圓もかゝる。算術ばかりか、代數まで終えた。

【三五〇】 か 疑をあらわすもの、推量の意、不定の意にも云う。

誰か居るだろう。幾年か經て。

【三五〇】 か

疑をあらわすもの、推量の意、不定の意にも云う。

誰かが居るだろう。 幾年かが歴た。 どこかにあろう。 何かの話、 誰かに聞こう。 紙か筆をくれよう。

降るか晴れるか、定まらぬ。 行こうか、歸ろうか。 出來ようかも知れぬ。

讀みか書きかする。

遠いか、近いか、見えない。 長いか、短いか、知らぬ。

打たれるか、突かれるか、分らぬ。 打たれか突かれかする。

讀ませるか、書かせるか、してみよう。 讀ませか書かせかする。

取つたか、取らぬか、知らぬ。 これだか、それだか、覺えて居ない。 なんだか不思議だ。

誰のかあろう。 どこからか來よう。 どこでか逢つた。 いとか、わるいとか、きめよう。 どちらえか向け。 そればかりかと思う。 これくらいかと考える。 いつまでか分らぬ。

「どうかこうかならう。」幾つかある。「赤くか黑くか、染めよう。」などゝ、副詞にも附く。

【三四九】【三五〇】 第一類の助詞 か

百圓どころか、千圓もかゝる。

算術ばかりか代數まで終えた。

○「何だかかだか、」など云う「か」わ、不定の代名詞(五四)の處に說いて置いた。

【三五三】 が 主語を示すもの、

人が居る。 大工が家を建てる。

雨が降る夜、 日が長い時、

路が遠い。 荷が重い。 遠くが見える。

煙の立つが見える。 負けるが勝ちだ。

長いがよい。 嬉しいが先に立つ。

讀ませるがよい。 言わぬが花だ。

國と國とが爭う。 これからが面白い。 子供までが勇む。 是れば かりが

恃である。 どこかが似て居る。 誰やらが言つた。

「今しばらくが大事だ」など、副詞にも附くことがある。

○叱る語に添えて意を强く云うもの、

あの小僧めが、 このたわけめが。

狂言記、長光 あのすつぱめが、あの横着者めが。

○名詞と名詞とを繫ぐもの、「五四七」の「の」の意味である。但し用いられること

が狹い。

が狹い。

己が物、我が子、誰が仕業か。

淺間が嶽、佐渡が島、

萬が一、十がひとつ、それが爲に出來た。十圓が直打わある。

年が年中、明日が日に來るかも知れぬ。

動詞と名詞とを繋いで、「云うが程の事わない」などゝも用いる。

室町時代

狂言記伊勢物語、今が今まで、隙入多くして、同長光、是れは、私の太刀でござるものを、かやつがのぢやと申すに因て、

江戸時代

日本永代藏、四、伊勢えびの高買、酢を買ひに來る人あり、云々、下男、目を覺し、何程がのと云ふ、むづかしながら、一文がのと云ふ。

舊案にわ「三五三」「四三〇」「五一五」の「が」を、一處にして、意味のちがいを書きわけて置いたが、上に附く語の種類に因て、離れ〳〵にせられた、外の助詞の、二處三處に別れて居るのも、その通りである。

【三五三】第一類の助詞が

○名詞と名詞とを繋ぐもの、「五四七」の「の」の意味である。但し用いられること

【三五四】 **から** 起點を示すもの、

神戸から上海へ行く。　馬からおりる。　楠から樟腦を採る。　風の吹くのは北からだ。

行くから歸るまで、連立つた。　生れるから成人するまで。世話をした。

高いから落ちて來る。

聞かれるから、返答するまでの時間、　始まらないから待つて居る。

出立したから、到着するまで、十日かゝつた。

來てから始まつた。　九州ばかりから產ずる。　誰やらから貰つた。

取つたとか、取らぬとか、から起つたあらそい、

「六時からが始まりだ。」見るからが、薄氣味のわるい奴だ。」見るからに、しくじりそうに思つた。」九時からにする。」京都からの便り、「南からも來る。」北からわ來ぬ。」朝からである。」など、上に附けて名詞のようにもあつかわれる。

「少しから、たんとになつた。」早くから來て、待つて居た。」など、副詞にも附く。

萬葉集、十七、　之乎(しを)(能登の地名)路可良(ぢから)、直越(たゝこし)え來れば、

土佐日記　明けぬから、舟を引きつゝのぼれども、

月詣集、十二　春風は、さらに吹くとも、あすからは、寄る年波は、立ちもかへらじ。

萬葉集十七　之乎(能登の地名)路可良直越え來れば

土佐日記　明けぬから、舟を引きつゝのぼれども、

月詣集、十二　春風は、さらに吹くとも、あすからは、寄る年波は、立ちもかへらじ。

史記抄、十七、　太史公曰カラシテ、豈不信哉ト云マデ、

○「見れば」見ると「思えば」など云う語に連ねて、物事を比べる意味を示すものがある。

昨日から見れば、今日わ暖い。　東京から見ると、京都わ靜だ。　それから思えば、この方が樂である。

○「四三五」にも「から」がある。

○「六歳より教育する。」午前八時より、午後四時まで、疾うより、存じて居ります。」など云う「より」もあるが、口語にわ、多く「から」の方を用いる。

【三五五】　きり　ぎり　「切り」(限り)と云う語を、下に「で」などを略して、其持前の意味で、助詞として用いるのである。

それぎり見えない。　口で言うぎり、何もしない。　年始に來るぎり、めつたに來ない。

これわ、「手本通り書く。」花が、二三分通り咲いた。」書く通り習う。」見た通り話す。」來年頃來よう。」夜の明けるころ起きる。」早いころ逢つた。」明日あたり出來よう。」來年あたり始まろう。」主人はじめ家族も喜ぶ。」役員はじめ會員も揃つた。」などゝ、同じ用法であつて、漢語で、「出來次第持つて來よう」毎年四月時分咲く」なども同じである。

次の助詞の「三五六」の「くらい、」「三六六」の「だけ」、「三八七」の「なり、」「三九五」の「ばかり、」「三九七」の「ほか、」「三九八」の「ほど、」「五三四」の「とも」なども、同じ用法である。

【三五六】 くらい　ぐらい　「位」の意味で、其位置程度を云うのであろう。「位に」の「に」を省いて、用法の變わつたものと思われる。用法わ、「三五五」に云つておいた副詞句を形作らせるもののようである。

馬ぐらい走る。　汽車ぐらい早い。

溢れるくらい盛る。　痛むくらい擊つ。

痛いくらい感ずる。　憎らしいくらい旨くやる。

針で突いたくらい、穴があいた。　讀まれぬくらい、字が細かい。

あの人とぐらい取組まれよう。　品川えぐらい行かれる。　十里までぐらいあるかれよう。　三つずつぐらいくれられる。

「百圓ぐらい」が相當である。十歳ぐらい、

いあるかれよう。　三つずつぐらいくれられる。

「百圓ぐらいが相當である。」「十歳ぐらいの子供、」「三等ぐらいを望む。」「十里ぐらいわあるかれる。」「教授ぐらいにわ進まれよう。」「三日ぐらいで出來る。」などわ、名詞のようである。

「すこしぐらい、取つてもよかろう。」「ちよつとぐらい、休んでもよい。」「只ぐらい、直がやすい」など、副詞にも附く。

【三五八】 こそ　物事を取立てゝ云う意味のもの、主語の位置を指す意のものもあるが、副詞句を形作らせる接尾辭のようなのものにもなる。

今日こそ吉日である。　これこそほんものだ。

教えるこそ、一番早路である。　仲のよいこそ幸だ。

責められるこそ、身の爲である。　讀ませこそするが、書かせわせぬ。　知らなかつたこそ、仕合であつた。

止めようとこそ思つた。　おまえにこそやろう。　茶をこそ飲んだが、菓子わ食わぬ。　仕舞までこそ見ぬが、大抵わ分つた。　命あつてこそ物種だ。

太神宮えこそ參ろう。　それを思えばこそ、骨折つて居るのだ。　長ければ

あの人とぐらい取組まれよう。　品川えぐらい行かれる。　十里までぐら

こそ切るのである。

「黒くこそならぬが、鼠色にわなつた。」はきとこそせぬが、見えぬことわない。」

懇にこそするが、心わ許されぬ。」さてこそ、旨く出來た。」ようこそ、お出でになりました。」またこそ、お目にかゝろう。」などわ、副詞に附くのである。

○反語の意となるもの、

押しても引いても、動かばこそ。　見えも飾りも、あらばこそ。

文語にわ、上に「こそ」のある時わ、下を「我れこそ行け。」花こそ落つれ。」人にこそ任すれ。」衣をこそ着れ。」路こそ無けれ。」人こそ見えね。」など丶結ぶ用法があるが、口語にわ殆ど亡びて居る。(鳥取縣などにわ、殘つてゐる。)但し「茶をこそ飲め、酒わ飲まぬ。」など稀に云うわ、文語の殘つて居るのである。

【三五九】 さ　輕く言いはなす意味を云う。感動詞のようである。

知れた事さ。　それわ、その筈さ。

友達の所えまいりますのさ。　どこえ行く、花見にさ。　なんでもよいわさ。

さればさ。

「そうさ、」「こうさ、」など丶副詞にも附く。

○「六一四」の接尾辭にも「さ」がある。

【三六〇】 さえ　文語の「さへ」の轉で、「どこへ行く、花見にさえ」の意味である。

「そうさ」、「こうさ」などゝ副詞にも附く。

○「六一四」の接尾辭にも「さ」がある。

【三六〇】 さえ 文語の「さへ」の轉で、「だに」「すら」の意である、或る物事を擧げて、その外を推量させるもの、主語を擧げるものもあるが、副詞句を形作らせる接尾辭のようにもなる。

水さえ、喉に通らぬ。 犬さえ食わぬ。

讀むさえむづかしい。 見るさえ許さぬ。

見られるさえつらい。

見てさえ驚く。 剛力でさえ持たれぬ。 子供にさえ出來る。 小學をさえ卒業しない。

狂言記、附子、 附子、云々、あの方から吹く風に當てさへ、そのまゝ滅却すると仰せられた。あの附子を食ふさへあるに、何と御秘藏の掛物が破らるるものぢや。

【三六二】「まで」の意味のもの、是れわ、文語の「さへ」の、添い加わる意の、殘つて居るのであろう。

おまえさえ、そういうのだものを、 言わないのさえ、言つたと云う。

【三六四】「だけ」の意味のもの、多くわ下を「れば」「なら」で承ける。

筆さえあれば、物わ書かれる。　湯さえあれば、茶わいらぬ。

讀みさえすれば分る。　行かれさえすればよろしい。

寒いさえこらえれば住われる。　暖くさえなれば出かける。

「靜にさえすれば落著く。」にこ〳〵とさえして居れば、機嫌がよい。」など、副詞にも附く。

【三六五】 しか 「しか」(語原わ分らぬ「し」わ「身にしあれば」など、「それ」と指す「し」であろうと云う。)わ「三九七」の「ほか」と同じ意味で、東京限りの方言かと思つて、舊案にわ擧げなかつたが、特別委員會で、立てることゝなつたのである。「しか」を「しきや」とも云うが、用いぬがよい。

【三六七】 だけ 物事を限つて云うもの「丈(たけ)五尺」などの「たけ」であろう、主語を限つて云うものもあるが、又副詞句を形作らせる接尾辭のようにもなる。用法の意わ「三五五」に云つてある。

これだけ餘す。　これだけほかない。

色の白いだけ見える。　長いだけ切る。

讀ませ書かせだけする。　餘つただけ捨てる。

色の白いだけ見える。　長いだけ切る。

讀ませ書かせだけする。　餘つただけ捨てる。

家族にだけ話す。　小學をだけ卒業した。　友達とだけ相談する。

これだけが殘つた。」云うだけが野暮だ。」これだけの事だ。」仲間だけに見せる。」

二人分だけを取る。」餘つたのわこれだけだ。」など云うわ、名詞のようである。

【三六八】　程合を示すもの、

自身があがるだけ、名が重くなる。　勉强するだけ、學問がすゝむ。　抑えれば抑えるだけ、はねあがる。

野が廣いだけ、眺めがよい。　脊が高いだけ、立派に見える。　近ければ近いだけ、聲がよく聞える。

褒められるだけ、氣が勇む。　何もしないだけ、過ちもない。　習つただけ、出來がよい。

醒睡笑、五、　てゝらは、膝だけあるきるものなり。

【三六九】　だけに　程合の相當する意味を云うもの、「ほどあつて」など云うと同じである、「に」わ、副詞を形作らせる助詞である、この「に」を省いて云うこともある。

身分が尊いだけに、身持もよい。學問を勵んだだけに、成績もよかつた。

【三七〇】 で　此「で」わ、「だ」の中止形であろうとわ、前の指定の助動詞の「だ」の所で云つておいた。「で」わ、鎌倉時代から見え、「だ」わ、遙に後に見えるから、いかゞであるが、今の口語にわ、「だ」の活用としてよかろうとも思う。

花である。　綺麗である。

これだけである。　二つずつでよい。

「行くでない」「讀むであろう」などわ、動詞に附き、「長いであろう」わ、形容詞に附き、「讀ませるであろう」「行かぬでよい」「逃がさないでおけ」「聞いたであろう」わ、助動詞に附き、「雨が降りそうである」わ、接尾辭に附く。

○「で」の下に「あるけれども、」又わ、「あつても」を略して云うことがある。

女で議論をする。　顏わ人で心は鬼だ。

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、　おなじあそび女とならば、たれもみな、あのやうでこそありたけれ。　同、二、西光がきられの事、　此後は、世が世でも候まじ。

同、二、小松教訓事、　一向、其義では候はず。　同、五、くわんじん帳、　文覺は、

ふてき第一の荒ひじりではあり、　同、十一、とをやの事、　舟いくさをい

ふてき第一の荒ひじりではあり、同、十一、とをやの事、舟いくさをいつてうれんし候べき、たとへば、魚の木にのぼりたるでこそ候はんずらめ。同、十二、六代事、最後の御供で候へば、くるしうも候はず。

法華經品釋、藥草喩品(東大寺藏、寛元四年七月)此條、目出事デハ候ヘドモ、

室町時代

幸若、入鹿、氷、手の内にかゞやくやうな鎌であり。同、富樫、武藏坊が有様、人間の業ではなかりけり。同、信田、これこそ、古への千手の姫で候なれ。

史記抄、八、三五 元鼎元年乙丑ノ年ハ、朔旦冬至デモナカツタヤラウゾ。

同、十四、七四 人ノ買ヲキシタリナンドセヌト云心デアツ、ベイゾ。

孟子抄一、五 禮デナケレバセヌゾ。同、三、三六 仁デモナイ、不仁デモナイ。

狂言記、釣狐、まづ、御息災で、めでたうこそござれ。狐などいふものは、執心深い物で、そのまゝ、仇(あだ)んをなすものでおぢやる。同、萩大名、先の亭主が知る人でないによつて、え行かれまい。同、二千石、只今の謠は、私の

同、二、小松敎訓事、一向、其義では候はず。同、五、くわんじん帳、文覺は、

存じて、唄はせたでは‖おりない。

伊曾保物語、　いかに、畜生な、道で‖ない、いたづらもの、

江戸時代

醒睡笑、二、　小豆のとうふか、いや、いつもの大豆ので‖候、」貴所の酒で‖も、我酒で‖もなふて、大酒がしてあそびたい。　同、七、　今ばかりで‖はなし、むかしよりある事なり。

太閤記、五、　内々、其望で‖はあり、我さきに進みしに因て、

犬子集、二、春、下、梨花、　櫻かよ、それで‖はなしの、花ざかり。

油糟、夏、　祇園會の、舟は神功皇后で、」女も具足、きるとこそきけ。　同、雜、　住よしの神は、お神で‖おはします。

新增犬筑波集、雜、　いかさまに、地藏ぼさつで、‖おはします。

正章千句、七、秋螢、　ながれ羽も、金で‖はあらじ、金衣鳥。

東海道名所記、西坂、(日坂)　旅の殿さ、御草臥で‖あるべいに、　同、京、島原、　樂阿彌にも、金銀おほくもたせたらば、いやで‖もあるまい。

西翁十百韻、岩城にて、　此里のみの、月で‖はあるまい。

○「で」に、いろ〳〵の意味あるが、すべて、文語の「にて」の約まつたものである。

伴蒿蹊の寛政十年作の閑田耕筆の四に、「平家物語の、景清は十六で‖ゼゼと討、

西翁十百韻、岩城にて、　此里のみの、月ではあるまい。

○「で」に、いろ〳〵の意味わあるが、すべて、文語の「にて」の約まつたものである。伴蒿蹊の寛政十年作の閑田耕筆の四に、「平家物語の、景清は十六でをぢを討、といへるごときでの字、にてに代るなり、にてをでといふは、にての約、ねなり、ねの濁音でなり、」とあるが、いかゞと思われる、「死にて」が、音便に「死んで」となると同じ例であろう。

○「四八三」「五二〇」にも「で」がある。

【三七一】副詞、又わ、副詞の語根に附くのわ、すべて、「三七〇」の「で」である。

専らである。　屹度である。　少しで、物足りない。　なぜでございますか。

いやでわあるまい。　そうでもありますまい。　静かでよい。　穏かでない。

【三七二】「で」に、「も」を重ねて云うものわ、次のように、迷いやすい。

飲まぬでも、食わぬでもよろしい。

右わ、前に云つた「で」に、「も」が添わつたものであるが、又「四二一」の大概を指すものとも解せられ、又、「飲まずともよろしい」食わずともよろしい」(四四八)の意味とも解せられる、前後の文の意味で、考えわける外仕方がない、これわ、多くわ、「でも」を重ねて云う時に起る。

【三七一】【三七二】第一類の助詞　で　でも

【三七六】 と 並べる意味を示す。

教師と生徒と出會う。兄と弟と話す。

行くと歸ると、一つになつた。言うと爲るとが、同じでない。

出來たと出來ぬとを分ける。見てと見ないとでわ、話がちがう。

「男の子と女の子とが遊ぶ。」「月と花との眺め、」「内と外とにある。」「筆と紙とを持つ。」「京都と大坂とえ行く。」「朝と晩とわいそがしい。」などゝ、上に附けて、名詞のようにあつかわれる。

「三人と一人と爭つた」。などの「と」わ、「五三三」のものである。

此「と」わ、「京都と大坂と神戸とえ行く。」と云うように、二箇所でも、三箇所でも「と」を入れるのを正則とするけれども、京都、大坂、神戸、と云うような、一語ずつの時わ、迷う事がないから、下の「と」を省いてもよい、しかし、「月曜日と、大祭日の翌日わ休む。」と云うように、一方が二三語の時わ、「月曜日と大祭日との翌日わ休む。」とか「月曜日と、大祭日の翌日とわ休む。」とかしなければ、心が分らぬから、「と」を、一々入れねばならぬ。「鈴木と井上の父を招く。」なども「鈴木と井上の父と」とか、「鈴木と井上との父」とか、區別すべきである。又「高橋と佐藤を訪う」などわ、「高橋と佐藤とを訪う。」のか、「高橋と共に佐藤を訪う。」のか紛れやすい、前後の意味で考えるがよい。

藤を訪う」などわ「高橋と佐藤と」を訪う。」のか「高橋と共に佐藤を訪う。」のか紛れやすい、前後の意味で考えるがよい。

【三七七】 と 指し定める意味のもの、

行くときめる。 讀めと言われる。

責められると覺悟する。 來ぬと見える。 これだと云う。

書物をと望む。 右えと走る。 五時からと定める。 六時までとする。 これば

かりと思う。 行つてと頼む。 これわと驚く。 行くなどと云う。 そこかこゝかとさがす。 されば云つて、

「專らとする」少しと見る」僅かと思われる」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附き、「やあと呼びかけた」さあと催促する」いざと云つてすぐに出る」など、感動詞にも附く。

問いかけるにわ「今、すぐに行くと、」なに、苦しいと、」などと、下略して云い、又、上略して、「とわ言いながら、そうも出來ぬ。」とやこうと云う。」ともかくも、そうしよう。」などとも云う。

○稀に「ありとあらゆる物」など云うわ、同じ動詞を重ねて言つて、意味を強

くする間に入れるもので、新勅撰集の四に、「萩の葉に、吹きと吹きぬる、秋風の、」讃岐集に、「春の内は、來と來む人を、花にまかせて」、など云う文語の名殘である。

○「で」の意味のもの、

我と我が身を恨む。　規則とある上わ守ろう。　僧侶とあるものが、不埒至極だ。

○轉化の意を示すもの、

水が湯となる。　木が石と化する。　黄が赤と變わる。　敵を身方とする。

○「のように」の意味のもの、

雨霰と降る。　烟と消える。　山と積上げる。　玉と碎ける。

○種々の語に附けて、副詞を形作らせるもの、

うか〳〵と進む。　こま〴〵と書く。　樂々となる。　不意と消える。

【三七八】

とても
とて

「とても」わ「と云つても」とあつても」としても」の略で、「とて」わ、そのまた略である、假に設けて云ふ意味を示す。

誰とて、勝つことは出來まい。

一寸出るとても、人力車に乘る。　事柄がどうあろうとてかまわぬ。

一寸出るとても、人力車に乗る。事柄がどうあろうとてかまわぬ。苦しいとて、我慢をしろ。敵が強いとて、恐れわせぬ。褒められるとて、圖に乗つてわならぬ。見させるとて、只わ見せぬ。善く出來たとて、自慢をするな。そう云つたとて、ほんとうとわ思われぬ。讀んだとて、分るまい。行きたいとて、行かれるものか。構わぬとても、程のあるものだ。子供だとて、聞きわけるだろう。そう云つたからとて、信用わ出來ぬ。遊へばとて、程がある。さればとて、捨てゝもおけぬ。

雜兵物語、下、又、馬取彦八、指物は、目に立つとても、云ひづらひ、名も無いものは、わるいものだぞ。

○「飲めとて茶を出す。」聞いたとて話す。」などわ、「と」と「て」との間に、「云う」を略したので違う。

○「とても出來ない」などわ、副詞となつたのである。

【三七九】 たつて　たつても　「たつて」わ、「と云つても」を約めて略したのである、東京方言か、と思つて、舊案にわ載せなかつたのである。

誰とて、勝つことは出來まい。

「とて」わそのまた略である假に設けて云ふ意味を示す

行くたつて、此姿でわ行かれない。遊ぶたつて、程のあるものだ。

○「たつて」「たつても」が「四六九」にあり、「だつて」が「五一九」にある、紛れやすい。

【三八〇】「として」の「して」だけのものわ、「五一六」に説いてある。

○「四四四」「四四九」「五三三」にも「と」がある。

【三八一】 どころ　どこ　事情を比べて、下に強める意味を云う。「所」の意から變わつて、程合を云うものか。「か」の「で」に連ねて用いられる。その「か」わ反語である。「どこ」わ、「どころ」の略である。

小學どころか、中學まで終えた。

見舞うどころか、手紙もやらぬ。　安心するどこでわない。

見させるどころか、聞かせもせぬ。　聞いたどこか、教えられた。　知らぬど

ころか、親類である。

「ちよつとどころの手間でわない。」「慥かどころか、極不安心だ。」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

【三八三】 など　大概をさしていふ意味のもの。

來るなどと返答した。　やめようなどとわ云うまい。　參りましようなど

と言います。

と言います。

宜しいなどと指圖する。

擊たれるなどと云うことがあるか。　實說だなどと話す。

以上、「と」を省いても云う、上に附いて名詞となるようである。

聞きなどして書く。　敎えなどして育てる。

呼ばれなどする。　やめさせなどして、

西えなど向いて、　叩いてなど見る。　水でなど煮る。　見たり聞いたりなどして、

「暖になどなつたら參ろう。」赤くなど塗る。」など、副詞にも附く。

「など」を、「なんど、」又わ「なぞ」なんぞ」とも云う、「なんか」とも云うが、用いぬがよい。

【三八五】　類のあるを云う意味のもの、複數を形作らせるものの、ようになり、

又、副詞句を形作らせるもののようにもなる。

銀行などの役人、　親兄弟などに話す。　子供など、遊ぶ。

寢るなどの場合でない。　行くなど、來るなどさまゞだ。

太いなど、細いなど、いろいろである。

【三八〇】……【三八五】　第一類の助詞　どころ　どこ　など

【三八三】　など　大概をさしていふ意味のもの

來るなどと返答した。　やめようなどとわ云うまい。　參りましょうなど

調べたなど、調べぬなど、まだきまらぬ。

幸若、烏帽子折、　盃なんど、をば、何として賜らうぞ。

史記抄、三、三三　涯分扶持ヲクワウナンドト云フ。

【三八六】 ［なら］ 事を假に定めて云う意味を示す、下に「ば」を添えて云うが、正則であるけれども、今わ全國ともに、多くわ省いて云う。

英書ならば讀めるが、獨逸書でわ讀めぬ。　雨天ならやめよう。　それならば參りましょう。

見るなら見せよう。　聞くならば話そう。

眠いなら寢ろ。　遠いなら車で行け。

こられるなら來い。　書かせるなら書かせろ。　讀んだなら分ろう。　出來ないならやめよう。　言わぬなら、聞こうと云うまい。

おまえとなら行こう。　三つずつなら、二つ餘る。

「いやならよせ。」靜かなら寢つかれよう」。など、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。　さようなら、（別れる時の言葉）

○「なら」の下の「ば」を略することも、隨分古くからである。

○「なら」の下の「ば」を略することも、隨分古くからである。

室町時代

狂言記、末廣がり、　人も傘をさすなら、我も傘をさゝうよ。

江戸時代

油糟、戀、　お爲なら、井どへ成共、落いらん。

後撰夷曲集、一、　さほひめの、もし傾城を、めさるなら、與太郎月や、知音ならまし。　同、五、　歌の文字、切付るなら、やはらがん、神の鳥居の、石のかたくと。

諸國盆踊唱歌、河内、　あわのなるとに、身はしづむとも、きみのことなら、そむくまい。　同、尾張、　をなごずきなら、八丈へゆきやれ、八丈むかしは、をなごじま。　同、下總、　どばし板なら、よかろもの、どんとふんでは、めをさます。　同、伊豫、　やみのまる木ばし、さまとならわたろ、おちてながれて、さきのよともに。

淋敷座の慰、のほゝんぶし、　てきと見るなら、びやくらい切るき、てきじやない物、君じや物。

○「なら」わ、稀に、打消の助動詞の「ず」ぬ「ない」に連つて、指し定める意味を打消に

云う、文語の名殘である。

一度ならず、二度も三度も、一方ならぬ御厄介になりました。外ならぬあなたの事、一方ならない世話を受けた。

○「退引(のつぴき)ならぬ場合」などわ、「退引が成らぬ」の意味で、是れとわ違う「それのみならず」などわ、成語の接續詞と見る。

○「なら」わ、指定の助動詞で、其活用わ、次のようである。

なら	なり	なる
なら	なり	な
		なれ
な	な	なれ

文語

口語

口語の「なら」わ、其將然形で、二段目の「なり」わ、其中止形である、(三八七)四段目の「な」わ、前の形容詞の「一六七」の「おだやかな」靜かな」立派な」綺麗な」などの「な」で、文語の連體形の「なる」の「る」の無くなつたので、(其所を見合わせよ、)已然形の「なれ」わ、口語にわ、「左樣なれば、頂戴いたします。」などゝ、用いぬこともないが、今わ、大抵、「なら」と言い變えて居る。又「好きなればこそ、上手になつた。」靜かなればこそこんな山に住んで居るのである。」などゝも云うが、是れわ、意味が違つて居て、今わ、多く、「であるから」だから」と云う。

文語の終止形の「なり」わ、口語でわ、次の「なりとも」(三九〇)の「なり」であるが、獨立

今わ、多く、「であるから」だから」と云う。

文語の終止形の「なり」わ、口語でわ、次の「なりとも」(三九〇)の「なり」であるが、獨立にわ、勘定書に、「金千圓也」など、稀に用いる外わ用いられぬ、但し、次に擧げる例わ、終止形の「なり」の「り」が無くなつたものかとも思われ、連體形の「る」がなくなつて、下略したものかとも思われるが、又感動の意味のものとも思われる、けれども、このような語わ、西國でわ、今も用いて居るが、東國でわ用いない。それで、終に、離れ〳〵のものとした、

室町時代

狂言記、宗論、　いかさま、どこやらで聞いたやうな。」それが強情な。」夜の目も寢ぬさうな。」これは耳よりな。」　同、素襖落、　參宮めさるげな。」　同、二人袴、ぢやに因て、住居も大きな。」　同、末廣がり、　田舍とちがふて、家立も格別な。」　同、伊勢物語、　男に向て、うろたへたとは、推參な。」

江戸時代

昨日は今日の物語、　只今、申さうといふ、それはあまりにきふな。」といへば、東海道名所記、赤坂、　座しきも奇麗な。」相宿もござらぬ。

次のようにわ、東京でも用いるが、上の感動詞に響いて、感動の意味が深い、助

詞の「五五四」に入つて居る。

あゝ、窮屈な。　えゝ面倒な。　やれ〳〵、氣の毒な。

○「な」にわ、差止める意の「書くな」起きるな、」(一三一)形容詞の「靜かな」立派な、」(一六七)敬讓の助動詞の命令の「お歸りな」讀みな、」(三〇三)助詞の「澤山あるな」(五五四)もある。

【三八八】　なり　「そのまゝに」の意を示す、「形(なり)」の義であろう、又わ「爲人(なりひと)」などの「なり」であろうか。用法の意わ、「三五五」に說いてある。

これなり持つて行け。　梅の實を靑いなり食う。　寢たなり話す。

「それなりにしておけ。」曲りなりに治まつた。」立つたなりの姿、」坐つたなりを寫す。」行つたなりになつてしまつた。」着たなりとなる。」寢たなりで居る。」などわ、名詞のようになる、又「言いなり次第になる。」など、用いる。

【三八九】　なり　の「でも」の意味のもの、語原わ、「三八六」を見よ。

湯なり粥なり啜つて居る。　一度なり見た上わ、

讀ませるなり、書かせるなり、してみよう。　見たなり、聞いたなり、はつきり

と言え。

墨でなり塗ろう。

墨でなり塗ろう。

「どうなりこうなり出來る。」少しなり、たんとなり、あり次第にする。など丶、副詞にも附く。

「思想なり感情なりの有無に因て、」歴史なり地理なりの講義を聽け。」湯なり茶なりが供えてある。」灰汁なり曹達なりを入れて、」大阪なり神戸なりえ送ろう。」紙なり風呂敷なりで包め。」など丶、名詞のようにも用いられる。

【三九〇】 なりとも　なりと　擇ぶに任せる意を示す、語原わ「三八六」を見よ。

（幾内邊でわ、「り」を省いて「なと」と云う。）

何なりと取れ。　是れなりとも持つて行け。

長いなりと、短いなりと、えりどれ。

呼ぶなりと、呼ばぬなりと、きめろ。　見たなりと、聞いたなりと、話せ。

茶をなりと飲め。　汽船になりとも、汽車になりとも、積んで送れ。　見てなりと、聞いてなりと、しておけ。　朝鮮えなりと、滿洲えなりと、賣り込め。　見るだけなりと、見て下され。

「ちよつとなりと來い。」少しなりと取れ。」早くなりと、遽丶なりと、出て來い。」な

ど丶、副詞にも附く。

狂言記、鞍馬參、　弓なりと、鎗なりと、鐵炮なりと、持て。　同、瓜盗人、　免すとなりと、免すまいとなりとも、有無を仰せられて下されませい。

○「なり」にわ、又、文語の指定の助動詞の「なり」の中止形のものを用いて、次のようにいうことがある、語原わ「三八六」を見よ。此「なり」わ、今わ、多く、「だし、」又わ「し」と云いかえる。

時わ夜なり、雨わ降る。　相手わ女なり、張合わなし、　家わ煉瓦造なり、座敷わ廣し、よい建築である。　學問が好きなり、酒が嫌いなり、身持に申分がない。

本も讀むなり、字も書くなり、感心だ。

脊わ高いなり、力わ強いなり、えらい男である。

出勤わ午前七時からなり、退出わ午後六時までなり、なか〳〵いそがしい。

貯えわ是れだけなり、外にわ何もなし。　割當わ三つずつなり、人數わ餘る。

平家物語、二、信連合戰、　敵は無案内なり、信連は案内者なり、あそこの馬道に追懸けては、はたときり、ここの詰りに追詰めては、ちやうと切る。

「數わ少しなり、人數わ多し、」性質わ穩かなり、智識わ廣し、」工合わよさそうな

に追懸けては、はたときり、ここの詰りに追詰めては、ちやうと切る。

「數わ少しなり、人數わ多し、」性質わ穩かなり、智識わ廣し、」工合わよさそうなり、これときめよう。」などゝ、副詞、又わ、副詞の語根、接尾辭にも附く。

【三九二】 に 事情の落ち付く所を示すもの、

花に匂がある。 子が父に似る。 心に思う。 遊びにはまる。 敵に勝つ。

病にかゝる。 夜露にあたる。 闇にまぎれる。 師匠に優る。 仕事に掛る。

問うに落ちず、語るに落ちる。 言うに任せる。

長いに限る。 說の委しいに據る。

見たについて知つた。 好きだに因て買う。

おまえとわたしとに限る。 何やかやにかまはぬ。

○「四五一」「五三五」にも「に」がある。

【三九三】 にして 「して」の意味わ「五一六」に云う。

【三九四】 の 物事を並べて、「又わ」「或わ」とか」の意味のもの、

春わ花だの、秋わ月だの、と言つて、もてはやす。 氣に入るの、いらぬの、よいの、わるいの、何の、かの、と云うことわ許さぬ。 痛いの、痛くないの、と言つて話にわならぬ。

「どうの、こうの、と云つてわならぬ。」など丶、副詞にも附く。

萬葉集、十、貧窮問答歌に「風まじり、雨降る夜乃、雨まじり、雪降る夜は、爲べもなく、寒くしあれば、」などあるわ、此意味か。

室町時代

狂言記、宗論、　法華經の、一部の、八卷の、と云ふ長い經を讀まうより、云々、

同、萩大名、　臑はぎの延びての、かゞうでの、と仰せらるゝ。　同、拔殼、　あれを忘れたの、これを忘れたの、と仰られまする。　同、鞍馬參、　御茶の、御酒の、とあつて、御馳走になる迷惑さ。

江戸時代

醒睡笑、六、　それ、歌には、云々、言葉のえんは、云々、らんの、けりの、かなの、とそれぞれにをく習ひあり。　同、八、　明暮、謠の、小鼓の、太鼓の、とて出入のたゆることなし。

西翁十百韻、大坂にて、　灸の、針の、と、よはさうな顏。

好色五人女、一、狀箱は宿に置て來た男、　ふる雨を日和にしたいの、生れつきたる鼻を高ふしてほしひの、とさま〳〵のおもひ事、　同、三、枕の夢、

是ぞとこがれて、なんの、かの、なしに、緣組を取いそぐぞおかしけれ。

西鶴置土產、五、都もさびし朝腹の獻立、　彼の法師、養食好み、祚の、鹽の、

きたる鼻を高ふしてほしひの、とさまぐのおもひ事、

同、三、枕の夢、

是ぞとこがれて、なんのかのなしに、縁組を取いそぐぞおかしけれ。

西鶴置土産、五、都もさびし朝腹の献立、彼の法師、養食好み、酢の鹽のと、舌うちして、云々、

○「四五六」「五四七」「五五六」にも「の」がある。

【三九五】 ばかり 限る意味のもの「計（はかり）」の義であろう、主語を限るものもあるが、副詞句を形作らせる接尾辭のようにもなる、用法の意わ、「三五五」に云つておいた。

自分ばかり、殘される。 妻子ばかり連れる。

恵まれるばかり、報いることがない。 讀ませるばかり、書かせわせぬ。

人をばかり、頼みとする。 見てばかり居る。 行こうとばかり、思つて居る。」

「これば、かりが入用だ。」人ばかりにたよる。」頼まぬばかりの事だ。」行先ばかりを考えて居る。」今日ばかりわ許す。」これば、かりも殘そう。」それば、かりかと思う。」唯泣くばかりだ。」美しいばかりで、趣がない。」など、云うのわ、名詞のようである。

○同じ意味の「のみ」と云う助詞があつて、「その事のみ氣にかゝる。」出るのみ

で、はいる事がない。」強いものの生殘る。」坐つてのみ居る。」あるとのみ思つた。」仕事にのみかゝつて居る。」などゝも云うけれども、多くわ用いられぬ。

○「それのみならず」わ、接續詞と見る。

【三九六】 程合頃合を云うもの、

五人ばかり居る。 三時間ばかり過ぎた。 三つばかりある。

許可されるばかりになつて居る。 今來たばかりだ。

「幾らばかりかゝつた。」少しばかり取る。」ちつとばかりある。」など、副詞にも附き、「五圓ばかりが利益だ。」一年ばかりになつた。」百圓ばかりを遣いなくした。」三町ばかりもあろう。」などわ、名詞のようである。

文語に云う「宵打過ぎて、子の時ばかりに、」八月十五日ばかりの月に、」などゝ、同じである。

○「ばかり」を「ばつかり、」又わ、「ばかし」ばつかし」とも云うが、用いぬがよい。

【三九七】 ほか 「それを外にしてわ」の意味下を打消の語で受ける、「外に」の「に」を省いて、用法の變わつたものと思われる、「五人ほか來ぬ」わ、「五人の外に誰も來ぬ、」水をほか飲まぬ」わ、「水を外にして何も飲まぬ」の意であろう、副詞句を形作らせる接尾辭のようである、用法の意わ、「三五五」に說いてある、「ほか」を、「ほき

作らせる接尾辭のようである、用法の意わ「三五五」に說いてある「ほか」を「ほきや」とも云うが、用いぬがよい。「三六五」の「しか」を見合せよ。

五人ほか、來ぬ。　私ほか知らぬ。

やめるほか、仕方がない。　ことわるほかありませぬ。

長いほかつかわれぬ。　近いほか見えぬ。

取られるほかない。　あやまらせるほか、工夫わあるまい。　見せないほか、仕樣がない。

水をほか飲まぬ。　南えほか向かぬ。　東からほか來ぬ。　これぐらいほか出來ぬ。　筆でほか書かれぬ。

「少しほかない。」「遲くほか行かれぬ。」「僅かほか殘つて居ない。」などゝ、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

「眞物とよりほか思われぬ」。などわ「より」(四一八)のところに說いてある。

○「それ外の事わ出來ぬ。」「これほかわない。」などわ、全くの名詞である。

【三九八】 ほど　程合分量を云うもの、「程に」の「に」を略して、用法が變わつたのであろう、用法の意わ「三五五」に說いてある。

山ほど高く、海ほど深い。百ほど數える。十人ほど居る。
間に合ふほど備える。覺えるほど教える。
憎いほど旨くやる。恥かしいほど見られる。
取られるほど取る。言わせるほど責めた。物が見えぬほど暗くなつた。
人が驚いたほどよく出來た。
「どれほどがおまえの分か。」「十年ほどの間、」「これほどとわ思わなかつた。」何ほどもない。」「どれほどか殘ろう。」などわ、名詞のようである。
○「手の屆くほどになつた。」云うがほどの事わない。」などわ、全くの名詞である。

【三九九】 比例する意味、程合に合う意味のもの、

思うほど迷う。年寄るほど達者になる。名が高くなるほど、身を慎まねばならぬ。
交りが久しいほど親しくなる。長ければ長いほど重寶である。
褒められるほど恥かしくなる。習わせるほど上達する。
「からだが丈夫なほど、勉强が出來る。」などゝ、形容詞にも附く。

○「頃に」「時分に」の意味のもの、

今朝ほど參ほど逢ほど來ほど。

○「頃に」時分に」の意味のもの、

今朝ほど參りました。　後ほど逢いましょう。　今ほど來られた。

【四〇一】 まで　至り及ぶ意味を示すもの、

東京から箱館まで行く。　後の事まで考える。　いつまでかゝるか。

降るから晴れるまで待つ。　焦るまで炙る。

ねむいまで起きて居る。　餘義ないまで辛抱する。

呼ばれるまで控えて居る。　卒業したまで知つて居る。

禮をまで言わせた。　こゝえまで來る。　誰やらまで話した。　あるかない

かまで穿鑿する。　よいとまで考えた。

「三人までが限りだ。」九時までの規則である。」これまでにする。」暮れぬまでに

行く。」十日までを限る。」明日までときめる。」兵卒までえ下さる。」などわ、上に附

けて、名詞のようにあつかわれる。

「遲くまで待つ。」遠くまで見える。」などわ、副詞に附いたものだ。

【四〇二】 限る意味を云うもの、名詞のようである。

出來ぬ時わ、それまでだ。　わるいと云えば、やめるまでの事です。　出來ぬ

までも、やつて見る。

狂言記、萩大名、　その樣なむづかしい所ならば、行くまいまでよ。　同、見物左衞門、　礫、云々、そちが投つたらば、此方からも參らせうまでよ。

【四〇三】　程度の意味のもの、

懇意な人まで來なくなる。　年寄まで騷ぎ出す。　大人が走れば、小供まで走る。　國學漢學わ、勿論の事、洋學まで學んだ。　雨天で、風まで吹いて來た。他人まで怨む。　實が三つまで、成つた。

雲と見るまで、花が咲いた。　見るまでもない。　風が膚寒いまでになつた。死ぬまでの事わあるまい。

【四〇四】　までも　「も」わ「四〇八」の「も」であろう。

【四〇五】　も　本文にわ、取りすべて云う意味のもの、(四〇六)並べて云う意味のもの、(四〇七)和げ又わ強めて云う意味のもの、(四〇八)假りに設けていふ意味のもの、(四一一)の四項にわけてある、其外にも、次のような意味のものがある。

○「さえ」まで」の意味のもの、

草木も眠る眞夜中の頃、　さすがの豪傑も破られない。　山中でわ、海の魚

○「さえ」まで」の意味のもの、

草木も眠る眞夜中の頃、　さすがの豪傑も破られない。　山中でわ、海の魚わ、見ることも出來ぬ。

聞くも恐ろしい。　見るもいやだ。

飛ぶ鳥をも落す勢、　手に取るをも待たない。　一言云つても おこられる。

思い出しても涙の種だ。

○「と」の意味のもの、

無いも同じだ。　貫つたも同樣です。　見たも同然である。

【四〇九】　同じ動詞の間に用いて、意味を強くするもの、

飲みも飲んだし、食いも食つた。

凄いも凄い。　遠いも遠い。

書かせも書かせた。　見たも見た。

【四一一】　假に設けて云う意味のもの「三七八」の「とても」とて、又わ「四四七」の「とも」と同じである。

金剛石も、磨かずば、玉の光わ、添わるまい。　一日も勤まらぬ。

いくら稼ぐも追付くまい。

行かずもよかろう。
讀まぬでも分ろう。　行つても行かないでもよい。　聞いても忘れよう。
死んでも申譯が立たぬ。　痛くも我慢をせよ。
「遲くも間に合おう。」短くもよろしい。」少くも百圓わかゝる。」などゝ、副詞にも附く。

○「四四七」の「とも」を見合せよ。

狂言記、釣狐、　何と言はれても、狐を釣りやむることはなるまい。　同、二人大名、　どうあつても、御供いたしませう。　同、仁王、　かやうに、態々參つても、自然、御留守なれば、いかゞでござる、あはれ、御宿にござつて下されかし。

雜兵物語、下、矢箱持、　首を取つても、手柄とはいはれまい。　同、下、玉箱持、捨てべいと思ふても、預かりものだ。

○裏返る、又、裏返す意味のもの、(「であるけれども」あるけれども」)
生立のよい者も、困ると、心がさもしくなる。　女も、いざとなれば強くなる。

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、　年おひ、よはひおとろへたる母、しらがをつけても、

平家物語、一、妓王の事、　年おひ、よはひおとろへたる母、しらがをつけても、なにゝかはせん。」この世は、かりのやどりなれば、はぢてもゝ〳〵、なにならず。

江戸時代

醒睡笑、六、　夏の夜は、宵ながら明けやすき月の、ふけてもゝ、いまだもどられねば、云々、

雑兵物語、下、玉箱持、又、　馬、云々、喰ものがわるくつてもゝ、筋をきられないが、畜生の身でも、嘸よかんべい。

【四一二】　や　並べる意を云う、多くわ「で」に伴う、その時わ、名詞のようにあつかわれる、この「で」わ、第三類の「で」(一)、(五二一)(二)(五二二)(三)(五二三)である。

士官や兵卒や樂隊が列をして行く。

聞き合わせるや調べるやでいそがしい。　見や聞きやして書く。

嬉しいやつらいやで、日をすごす。

呼ばれるや聞かれるやで、暇をつぶす。　讀ませるや書かせるやで急ぐ。

見たや見ないやで爭う。

【四一二】第一類の助詞　や

「何やかや‖が溜まつて居る。」それや‖これや‖に對して、」などわ、名詞のようにあつかわれる。

「ちつとや‖そつとの事でわない。」遠くや‖近くに居る親類、」などゝ、副詞にも附く。

○「四二七」にも「や」がある。

平安朝時代

蜻蛉日記、上ノ下、　柚や‖梨や‖などを、なつかしげに持たりて、食ひなどする。

梁塵祕抄二、雜、　むまのこや‖うしのこに、くゐさせてん。

室町時代

義經記、よしつね、辨慶、君臣けいやくの事、　女や‖あまわらべども、あはてふためき、

曾我物語、小次郎かたらひ得ざる事、　五つや‖みつになりしを、さうのひざにすへて、　同、十番ぎりの事、　こゝや‖かしこに、むらだつて、よするものこそなかりけれ。　同、虎、出であひよびいれし事、　なき人の母や‖姉を見るよりも、

史記抄、七、五三　車馬ヤ‖女ヤ‖ナンドアルト云モ、此心ゾ。　同、十、六九　柘木

史記抄、七、五三　車馬ヤ‖女ヤ‖ナンドアルト云モ、此心ゾ。　同、十、六九　柘木ヤ‖竹デ作タ弓ゾ。

孟子抄、七、二八　樂ハ樂也、タノシムノ笛ヤ‖ナドヲ吹ク事デハ無イゾ。　同、八、四　土芥ノ土ヤ‖アクタノ如ク思テ、

狂言記、惡坊、　其傘の十本や‖廿本は、切折て御目にかけう。」衣やら、ぢよろや‖傘があるとは、何とも合點のゆかぬ事ぢや。

江戸時代

昨日は今日の物語、　くすりや‖ゆが、口へ入ほどならば、」もちや‖まんぢうに、さねがあらばよからう。

諸國盆踊唱歌、大和、　わかいせなごの、ぐわんかけるのは、神や‖佛も、をかしかろ。

【四一四】 やら　不定に並べる意味のもの、「四一五」の「やら」から意味の變わつたものであろう。

笛やら‖太鼓やら‖喇叭やら‖で、賑やかだ。　何やら‖かやら‖で、いそがしい。

出るやら‖這入るやら‖混雜する。

【四一四】 第一類の助詞　やら

痛いやら痒いやらで、こらえられぬ。長いやら短いやら、いろ〳〵ある。食わせるやら着せるやら、隨分世話な事だ。聞くやら聞かぬやら、心々だ。神戸えやら長崎えやら、旅する度に、

「朝鮮やら滿洲やらが饑饉の時、」陸軍やら海軍やらに、御用があつて、「嬉しいやら悲しいやらを取りませて話す。」箱館やら小樽やらえも、送らねばならぬ。」女やら子供やらは、嬉しそうだ。」などわ、名詞のようになる。

「赤くやら青くやら、さま〳〵に塗る。」などわ、副詞に附く。

【四一五】疑を示すもの、推量する意、不定に云う意もある、文語の「にやあらむ」の「やらむ」と約まつたもの、「む」の無くなつたのである。

誰やら分らぬ。何が何やら、目當がつかぬ。何やら見える。

行くやら止まるやら知れぬ。どうなるやら分らぬ。出來ようやら出來まいやら、推量わできぬ。

多いやら少ないやら、見込が立たぬ。

降られるやら、測りがたい。役に立つやら立たぬやら、考えものだ。見たやら見ないやら、私は知らぬ。どうしたやら、便りがない。花だやら雲だやら、見分けられぬ。

やら見ないやら、私は知らぬ。　どうしたやら、便りがない。　花だやら雲だやら、見分けられぬ。

郵便の屆かぬのやら、返辭が來ぬ。　誰にやらくれた。　何とやら云つた。

支那えやら行つた。　見てやら見ないでやら、知らぬ。　電車でやら行つた。

「誰やらが云つた。」誰やらにくれた。」十圓やらになつた。」歷史やらを學んで、」誰やらと話した。」京都やらえ行きました。」誰やらから聞いた。」どこやらで見た。」

などわ、名詞のようなあつかいである。

「少しやら澤山やら、尋ねて見よう。」どうやら、雨が降りそうだ。」どうやらこうやら、出來よう。」慥かやらあぶないやら、きめられぬ。」など丶、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

室町時代

狂言記、宗論、「又どれへやら行くわ。」あるやらないやら、何を其方が知つて、いかさま、どこやらで聞いたやうな。」其法然とやらが言つた事、」其連が、一日二日で參らうやら、二十日三十日、手間が取れうも知れぬ。　同、伯母酒、こなたへ參つたとやら申まする。　同、萩大名、　まだ、後に、何やらあつたやうな。　同、釣狐、　何とやら、ふしぎな事もござつた。

古今夷曲集、一、　見るに日は、西へねぢれど、藤の花、じきになるやら、ひだるさもなし。

日本永代藏、三、紙子身袋（しんだい）の破れ時、　え方が東やら、南に梅が咲くやら、暦さへもたずして、

雜兵物語、下、草履取、　はなばかりかいて、上髭が付かないで、女のくびやら、男の首やらしれない。

【四一七】　より　比べて云う意味のもの、

鴉より黑い。　それより、これがよい。

行くより、歸る方が早い。　わたしに聞こうより、あの人に聞くがよい。

嬉しいより、悲しい事が多い。　長いより、短いのがよい。

待たれるより、待つ身がつらい。　書かせるより、讀ませる方にする。　言わぬよりましだ。　思つたより多くある。

米ばかりより、麥をまぜるがよい。　三圓ぐらいより上のことわない。

「それよりか、これがよい。」など、もつかわれる、「よりか」の「か」わ、區別するの意のもので、反語の「か」（三四九）から變つたのであらう、「わ」の意に聞える「四一九」

のもので、反語の「か」(三四九)から變つたのであらう、「わ」の意に聞える「四一九」を見合わせよ。

それよりかこれがよい。　書くよりか讀むが早い。　山よりか高い。

○「から」の意味の「より」わ、「から」の所(三五四)に云つて置いた。

【四一八】　限る意味のもの、「ほか」ほかに」に伴う、下を打消の語で承ける。

一人の子よりほか持たない女、　學問より外に、好きわない。

ほんものとよりほか思われぬ。

○「三九七」を見合わせよ。

【四一九】　わ　文語の「は」である、區別する意味を云うもの、

夏わ暑くて、冬わ寒い。　大わ、小をかねる。　人わ萬物の靈である。

見るわよい。　手を附けるわわるい。　聞きわする。　手を附けわせぬ。

輕いわ羽で、重いわ石だ。　早いわ飛行機である。

擊たれるわ苦しい。　擊たれわした。　心配させるわわるい。　心配させわ

せぬ。　行かぬわよくない。　聞いたわ間違であつた。　行きたいわやまや

まだ。

人にわ‖劣らぬ。外えわ‖やらぬ。ほんものとわ‖見えない。雪よりわ‖白い。門からわ‖出さぬ。明日までわ‖待つ。見てわ‖おく。讀んでわ‖見ぬ。力でばかりわ‖仕遂げられぬ。それだけわ‖ある。これでわ‖ない。幾年かわ‖過ぎた。

「慥かにわ‖言われぬ。」「稀にわ‖ある。」「まずわ‖よろしい。」「凡そわ‖その通り、」「ちよつとわ‖とまる。」「たゞわ‖濟まさぬ。」「さてわ‖さようか。」「善くわ‖分らぬ。」「遲くわ‖あるまい。」嬉しくわ‖思う。」「聊かわ‖心得て居る。」などゝ、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。「山又わ‖川、」「但しわ‖これか、」などわ、接續詞に附くのである。

○同じ語の間に加えて、慥にそうであると云う意味を云うもの、

草わ‖草だが、何草だろう。綺麗わ‖綺麗だが、趣がない。

讀むにわ‖讀んだ。食いわ‖食つた。來わ‖來たが、すぐに歸つた。聞きわ‖聞くものゝ、取次ぐことわ出來ぬ。

遠いわ‖遠いが、行かねばなるまい。

聞かれわ‖聞かれた。讀ませわ‖讀ませた。見たわ‖見た。

○「でわ」の意味のもの、

東海道わ‖、靜岡の町で、東京わ‖、神田の大工町、

○「で わ」の意味のもの、

東海道わ‖、静岡の町で、　東京わ‖、神田の大工町、
狂言記、宗論、　こなたは、都わ‖どこにござるぞ。
○「を」の下に用いると、「ば」となる。
茶をば‖飲む、酒をば‖飲まぬ。　車夫をば‖使にやる。
○「ば」わ「五〇二」にもある。
「を」を略すると、また「わ」となる。
茶わ‖飲む、酒わ‖飲まぬ。　我慢わ‖して居る。　出來たわ‖くれる。　短いわ‖捨てる。　これだけわ‖殘す。
○「わ」わ「四六七」にもある。

第二

【四二一】 でも 文語の「にても」の轉である、(「三七〇」の「で」の所で云つておいた、)大概を指す意味のもの、「で」わ、「五二三」の「で」で、「も」わ、「四〇六」か「四〇八」の「も」であろう。

百圓でも‖千圓でも‖出す。　何でも‖出來る。　人でも‖來るとわるい。　どれで‖もよい。

【四二二】 第一類の助詞　でも

聞きでもすればよいに。

教えられでもしたら覺えよう。　讀ませでもすれば分ろう。

何とでもしろ。　どこえでも行け。　これば かりでもよい。　それくらいでも間に合おう。　遊んででも居ろ。　東京ででも賣弘めよう。

「時が早くでもあつたら行こう。」心安くでもなつたら話そう。」全くでもない。」たまさかにでも逢いたい。」ちよつとでもとまれ。」少しでもあればよい。」などわ、副詞に附く。

室町時代

狂言記、佛師、　佛師なら、佛師でよさゝうなものを、眞佛師と仰せらるゝには、仔細でもござるか。　同、こんくわい、　はて、御茶でもまゐらせいで。同、二千石、　御手討にでも會ひませうかと存じて、身の毛をつめて居りました。

伊曾保物語、　何でもあれ、存ぜぬことはない。

江戸時代

雜兵物語、上、弓足輕小頭、　刀でも脇差でも、勝手次第にひん拔て、　同、上、鐵炮足輕小頭、　死人の血でも、又は、どろのすんだ上水でも、すゝつて居な

雜兵物語、上、弓足輕小頭、刀でも脇差でも、勝手次第にひん拔て、同、上、鐵炮足輕小頭、死人の血でも、又は、どろのすんだ上水(うはみづ)でも、すゝつて居なされ。

【四二二】 ながら 「そのまゝ」の意味のもの、

蔭ながら喜んで居る。心ながらの苦勞、

生きながら、神に祭られる。生れながら、國王である。居ながら、敵を待つ。

ちいさいながら、能く働く。

【四二三】 二つの動作を、同時に行う意味を云うもの、

見ながら寫す。あるきながら眺める。遊びながらのかせぎ、涙を流しながら話す。

敎えられながら考える。

○「であるけれども」の意味のもの、

大儀ながら行つてくれ。

知りながら改めぬ。思いながら、不沙汰した。とわ言いながら、決められぬ。

呼ばれながら、返辭をせぬ。何も言はぬながら、心にわ承知して居る。

「いや〳〵ながら引受ける。」僅かながら差出します。」聊かながら返禮する。」などゝ、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

「恐れながら」憚りながら」及ばずながら」などわ、副詞と見、「さりながら」しかしながら」などわ、接續詞と見る。

○「散歩がてら買物をする。」御禮かたゞ〳〵参上いたします」など云う助詞もある。

○「見つゝ寫す。」あるきつゝ眺める。」などゝも云うわ、文語であろう、口語の「つつ」わ、「知りつゝ改めぬ」(四八二)などゝ、この條の「ながら」の意味に用いる。

第三

【四二七】 [や] [やい] 呼びかけるもの、

太郎や、梅子や。 みんなで行こうや。 もうよそうや。

「それ見や。」そんなことわやめろや。」やれ嬉しや。」こゝにわ無いや。」なんにも知らないや。」誰ぞ居るかやい。」よしてくれやあ。」みんな來いやあ。」次郎やあい。」などゝ云う「や」やい」やあ」やあい」もある。

狂言記、相合袴、 やい、冠者、行て呼びましてこいや。 同、口眞似、 太郎冠者居るかやい。

「四一二」にも「や」がある。

狂言記、相合袴、やい、冠者、行て呼びましてこいや。同、口眞似、太郎冠者

居るかやい。「四一二」にも「や」がある。

第二類の助詞

第一

【四三一】 が くいちがう意のもの、「四三七」の「けれども」に似て居る。「樺太わ寒くわあるが、しかし産物わ多い。」などゝ書く人があるが、重複である。

空わ晴れるが、風は止まぬ。工夫わするが、どうも出來ぬ。

風わ寒いが、天氣わよい。出るわ早いが、這入るわ遲い。遊ぶもよいが、氣を付けねばならぬぞ。

教えられるが忘れる。頻といそがせるが、はかどらぬ。字わ讀めるが書けぬ。考えたが、案じがつかぬ。無いと云つたが、やつぱりある。行きたいが、やめよう。これわ花だが、匂がない。

鎌倉時代

宇治拾遺物語、五、一二、その時は、わびしう堪へがたく覺え候ひしが、おくれまゐらせて後は、など、さおぼえ候ひけむ、悔しう候ふなりといふ。

室町時代

【四二七】【四三一】 や やい

史記抄、六、四七、　高帝卽位處ナンドヽシサウナガ、サモナイゾ。

狂言記、萩大名、　夫は行きたいものぢやが、先の亭主が知る人でないによつて、得行かれまい。　同、烏帽子折、　出たまでは、七五三飾、門松がなかつたが、今は七五三飾で、賴うだ御宿を忘れた。

【四三二】　前の事を言い終えて、後の事に續けるもの、

世わ夢のようだと云うが、嘘でわない。　序に云つて置くが、明日わ早く起きろ。　何とか名をつけようと思うが、よい名わないか。

毎日敎えられるが、段々上手になる。　本を讀ませるが、よく覺えねばならぬぞ。　昨日見たが、面白かつた。　御安着になつたそうですが、御喜び申します。　實の事だが、それわ出來ない。

狂言記、萩大名、　下京邊に、よい庭を持たれた御方のござるが、これに、只今、宮城野の萩が盛でござる。」歌、云々、こなたへ敎へませうが、何とでござる。

同、柿山伏、　某、樹木をあまた持てござるが、當年は、柿が大なりいたいてござる。　同、神鳴、　藥代をやりたいが、此砌ぢやに因て、何もないが、何とせうぞ。

【四三三】　假に設て云う意味のもの、「三七八」の「とて、」「四四八」の「とも」に似て居る。

【四三三】 假に設て云う意味のもの、「三七八」の「とて、」「四四八」の「とも」に似て居る。

死のうが、かまわぬ。 あろうがなかろうが、貪着せぬ。 うめこうがもがこうが、所詮かなわぬ。

【四三四】 念を推して云う意味のもの、

無い筈わないが。 今歸つた、早かろうがの。 勝てそうなものだが、なあ。

狂言記、拔殼、 酒、云々、もひとつ喫ませう、過ぎすげうがな。 同、柿山伏、 あいつが困る事が、ありさうなものぢやが。 同、宗論、 さうは云うまいが。

の。

○「三五三」「五一四」にも「が」がある。

【四三五】 から 「に因て」「故に」の意味で、副詞を形作らせる接尾辭のようである。

そうであるからして、話されない。 實說であろうから話す。

少しでもよいから、送つてくれ。

責められるから言う。 讀ませるから分る。 尋ねたから逢われた。 それだから、行けと云うに。

○「それだから」を略して、「だから」と接續詞に用いられる。

萬葉集、十八、　明日よりは、つぎてきこえむ、時鳥、一夜の可良に、戀ひわたるかも。

古今集、八、離別、　惜むから、戀しきものを、白雲の、立ちなむ後は、何ごゝちせむ。

【四三六】「わ、」又わ、「にわ」に連ねて、「上わ」の意味となるもの、

わたしが行くからわ、只わ濟ませない。　あれがそう云うからにわ、承知しまい。

聞かれるからにわ、返答しよう。　言わぬからにわ、仔細があろう。　見たからにわ、のがされない。

○「三五四」にも「から」がある。

【四三七】　けれども　反對になり、裏返る意味を云う、「四九〇」の「ても」でも」と同じ意味である、文語の形容詞の活用の「長けれども」苦しけれども」などの、「長いけれども」苦しいけれども」などゝなつたものが移つて、動詞にも附くようになつたものであろう、略して、「けれど」と云うこともある、又「けども」けど」などゝも云うが、これわ用いぬがよい。

なつたものであろう、略して、「けれど」と云うこともある、又「けども」「けど」などゝも云うが、これわ用いぬがよい。

讀むけれども、書かぬ。それでもよかろうけれども、先、やめるがよい。

太いけれども、折れやすい。いそがしいけれど、手傳つてやる。

撃たれるけれども、逃げない。見させるけれど、手に取ることわ許さぬ。

しないけれども、したと言われる。聞いたけれども、話さぬ。讀んだけれども、忘れた。雨天だけれども、出かける。

○「けれども」わ、獨立に用いれば、接續詞ともなる。

【四三八】 し 並べて指して、下に云いつゞける意味を云うもの「爲る」の中止形の「し」で、文語の「讀みもし書きもする」などから移つて、「讀みもするし書きもする」と用いるようになつたものでもあろうか。

花わ咲くし、鳥は囀るし、面白い春になつた。雨も降ろうし、風も吹こうし、海上わ難儀であろう。

朝わ早いし、夜は遲いし、暇がない。

倒されるし、踏まれるし、つらい目に逢つた。角力でも勝つたし、劍術でも勝つた。酒も飲まぬし、煙草も吸わぬ。電信わ不通だし、郵便わ後れるし、

仕様がない。

○「ものを」、又わ「のに」の意味に用いるもの、

法律家の討論でわあるまいし、そんなに理窟を云うにも及ぶまい。おまえの働きばかりでわないし、獨りで自慢わ出來まい。

狂言記、宗論、はて、來いで何とせう、連ぢやものを、編みつれた身でわあるまいし、また、どれへやら行くわ。

【四三九】 せ 念を推して云う意味のもの「ぞえ」の約まつたものであろう。

花が咲くせ。あすわ來ようせ。

仕事わ苦しいせ。朝わ早いせ。

叱られるせ。これから行きますせ。人わ來ないせ。ありませぬせ。もう出來たせ。出來まいせ。困つたものだせ。何もないらしいせ。

【四四〇】 ぞ 念を推して云い聞かせる意味のもの、

今日行くぞ。後に來るぞ。どこかにあろうぞ。

あすの朝、起きるわ早いぞ。路わ遠いぞ。

人に恨まれるぞ。恥をかゝせるぞ。慥に見たぞ。何もせぬぞ。言うこ

とを聞かないぞ。瑕をつけまいぞ。空わ晴れるらしいぞ。行くのわ、今

人に恨まれるぞ。恥をかゝせるぞ。慥に見たぞ。何もせぬぞ。言うこ

とを聞かないぞ。瑕をつけまいぞ。空わ晴れるらしいぞ。行くのわ、今日だぞ。

古今集、十二、逢ふを限りと、思ふばかりぞ。

狂言記、連歌毘沙門、何と思召すぞ。いかにして、獨で取られはいたされまいぞ。

諸國盆踊唱歌、讃岐、なぜにそなたに、ながないぞ。

○疑う語に伴つて、反語の意味を含むもの、

どうして出來ようぞ。誰とて、そんな事を云ふものがあろうぞ。

【四四一】指し定める意味を云うもの、或る代名詞に附く。

何ぞあるか。誰ぞ頼もう。どこぞ痛むか、どれぞ取れ。是れぞと云う程の事もない。何ぞと云うと持出す。

「どうぞ、こうぞ、せねばならぬ。」「ついぞ、見た事わない。」など、副詞にも附く。

文語にわ「ぞ」の「かゝり、」「むすび」の法則があるが、口語にわ、動詞、形容詞、助動詞、共に、終止形と連體形と同じであるから、區別わ立たぬ。

何ぞの種になろう、「どこぞにあろう。」「これぞと思いつくこともない。」など、

「の」に」とでも承ける。

【四四二】 そう 推量する意味を云う「狀(さま)」が「さう」となつて、又變わつたものであろう「そう」わ、接尾辭(六一六)にもある、この用法の轉じたものであろう、こゝの助詞の「そう」との區別わ、次のようである。

助詞 「そう」 行くそうだ。 早いそうだ。 出來ぬそうだ。

動詞、形容詞、助動詞のあるものゝ連體形に附き、「他の上に就いて、そのように見える」と云う意で、下に「だ」で「です」を履む、名詞の姿であるが、獨立に用いられないから、助詞とする。

接尾辭 「そう」 行きそうだ。 早そうだ。 不思議そうな顔、

動詞、助動詞の連用形、形容詞の語根、漢語、名詞等に附き、「自分の推量で、そのように思われる」と云う意味で、下に「だ」で「です」に「な」「なら」などを履み、上の語と熟して、名詞のようになる、尙「六一六」を見よ。

聽くそうだ。 話すそうだ。

痛いそうで泣く。 嬉しいそうで笑う。

聞かれるそうだ。 讀ませるそうだ。 勝てるそうだ。 勝てないそうだ。

出來ぬそうだ。 聞いたそうだ。 讀んだそうです。 見たいそうです。 人

出來ぬそうだ。　聞いたそうだ。　讀んだそうです。　見たいそうです。　人だそうだ。　女だそうだ。

室町時代

狂言記、末廣がり、　末廣がりはござらぬか、爰にはないさうな。　同、苞山伏、

こなたも、こゝに休ましやつてござつたさうなり、身共も、こゝにふせつてござる。　同、伯母が酒、　あゝ、少し醉うたさうな。

江戸時代

古今夷曲集、九、　宗貳といふもの、淺香といふ遊女に思ひ入て、云々、　足拔が、ならぬさうにぞ、見えらるゝ、淺香の沼に、はまりたまひて。

此「なり」に「わ」、今の東京口語には用いない。

【四四三】 て　獨り自分で合點して居る意味である、「と云ふ」を「てふ」と云う、その「て」の殘つたものであろう。

花が咲くて。　何も出來まいて。　その事だて。　それわ格別だて。

○「四八二」にも「て」がある。

【四四五】 と　條件を云うもの「五〇三」の「ば」の意味と似て居る。

【四四二】【四四三】【四四五】　第二類の助詞　そう　て　と

打つと響く。落すとこわれよう。逃げると逐う。見るといけませぬ。
餘り長いと切られる。めずらしいともてはやされる。
押されると倒れる。讀ませると分る。早く行かぬと、間に合わぬ。明日
わ休みだとよい。

「打てば」長ければ」押されゝば」の意である。

【四四六】事の一處に落合うもの、
聞くと、そのまゝ立上り、寄るとさわると噂する。行くと始つた。
撃たれると、すぐ倒れた。讀ませると、分つたと云つた。
狂言記、吃の「私の留守になると、酒ばかり飲うで」などの「と」わ、是れであろう
か、「なる時わ」の意味か。

○「三七五」「五三三」にも「と」がある。

【四四八】【四四九】

とも

と

假に設けて云う意味のもの、
何をしようとも、勝手次第だ。雨が降ろうとも、行くときめる。
撃たれようと斬られようと、かまわぬ。行かずとよかろう。言わずとも、
知れたことだ。見ずともよろしい。

一日なりと勤めた上わ、何なりとも取れ。

知れたことだ。見ず「ともよろしい。

一日なりと勤めた上わ、何なりとも取れ。

金わなくとも、智慧さえあればよい。少くとも、百圓わかゝくる。遅くとも、

間に合おう。短くともよろしい。(この「とも」わ「ても」ともなる。(四九〇)

行かずともの事だ。

○「五三四」にも「とも」がある、「四一一」の「も」(假に設けて云うもの)をも見合わせよ。尙「四四四」「五三三」にも「と」がある。

○「行くとも歸るとも、きめるがよい。」など云うわ「行くときめる」歸るときめる」の間に、並べて云う意の「も」(四〇七)を加えてつないだもので、これとわ違う。

【四五〇】 **とも** 自ら信ずる意、疑おうようのない意、勿論の意のもの、

あるか、あるとも、屹度ある。

嬉しいか、嬉しいとも。

讀まれるか、讀まれるとも。よろしうございますとも。見たとも、〳〵。

○「五三四」にも「とも」がある。

狂言記、末廣がり、此御禮は、重ねて都へ上つて、御尋ね申して、きつと申し

【四四六】…【四五〇】 第二類の助詞 と とも

ませう、御尋ねに預ろうとも。　同、宗論、　都まで、とくと御供致さう、何がさて、とくと御供いたさうとも、扨こなたは、云々、「春園に、芋といふものをうゆるか、を丶、なか〳〵、植るとも。」を丶、いかにも、あるとも。　同、附子、　今日は、賴うだ人の御留守ぢやに因て、ゆるりと居て話さうよ、何がさて、ゆるりと居て話さうとも。」

【四五三】 に　同じ動詞の間において、意味を強めるもの、

待ちに待つた。　思いに思つて、

文語の「聞きに聞き、語りに語る。」ゐさりにのみゐさる。」など丶、同じである。

【四五四】 同じ動詞の間において、下に、可能打消の意味をあらわす語をおいたもの、

越すに越されぬ。

【四五五】 動作の目的を指すもの。

花見に行く。　物を買いに出かける。　知らせに來た。

【四五六】 の　「もの」こと、又わ「ところ」方（ほう）の意味で、名詞のように用いるもの、

行くのを嫌う。　そうするのもよろしい。

長いのわ不用である。　嚴しいのに困る。　慥かなのにきめる。

長いのわ不用である。　嚴しいのに困る。　慥かなのにきめる。
責められるのがつらい。　精出さぬのわわるい。　昔からあつたのにする。
○女子の言葉に「何をするの。」なぜ早くこないの。」どうなさつたの。」など丶云
う「の」わ、問いかける意味であるが、是れわ、下に「か」ですか」などを略して云う
のである。

醒睡笑、八、　喝食あり、東堂に膳をすゆる時、和尚、あつぱれ、月輪かな、喝食、ほ
しくないの、とて膳をとりぬ。

○「三九四」「五四七」「五五六」にも「の」がある。

【四五七】　のに　此「の」わ、「四五六」の「もの」こと」ところ」などの意味で、名詞のよう
に用いられる「の」であらう、上の事情にかゝわらぬ意味わ「に」にある「の」なしに、
「に」とばかりでも用いる。

行けと云うのに、なぜ行かない。　日わ暮れかゝるのに、路わ遠い。　あつた
と思うにない。　折もあらうに、此混雑の中で、
まだ早いのに、もう歸るか。　いそげばよいに、ぐず〳〵して居る。
讀ませるのに讀まない。　風も吹かぬのに、花が散る。　夜が明けたのに、ま

だ起きない。待つて居たに來ない。

○「三九一」「四五一」「五三五」にも「に」がある。

【四五八】 ものか もんか 「か」わ「三四九」の反語の「か」で、文語の「ものかは」の略で「もん」わ「もの」の轉である。

源氏物語、横笛、かゝる夜の月に、心やすく夢みる人は、あるものか。

【四六二】 ものゝ 事の裏返る意を云うもの「四三七」の「けれども」と同じである、多くわ、上に「わ」を伴う。

雪わ降るものゝ、さほど寒くわない。勉強わするものゝ、學力わ進まぬ。

出來わよいものゝ、直段わ高い。美しいわ美しいものゝ、趣わない。

褒められわしたものゝ、安心わ出來ぬ。忘れわせぬものゝ、うと〳〵しくなる。

古今集、十四、戀、四、 空蟬の、世の人ごとの、しげゝれば、忘れぬものゝ、かれぬべらなり。

伊勢物語 君來むと、いひしよごとに、過ぎぬれば、頼まぬものゝ、戀ひつゝぞふる。

【四六三】 ものを 事の裏返る意味を云う。

こちらでわ深切でするものを、ありがたいとも思わぬ。尋ねて來たもの

【四六三】 ものを 事の裏返る意味を云う。

こちらでわ深切でするものを、ありがたいとも思わぬ。尋ねて來たものを、逢つてもくれぬ。行くはずであつたものを、行かなかつた。

【四六四】 ことを 意味わ「ものを」とおなじてある。

せずともよいことを、餘計な事をした。

【四六五】 よう 樣の字の音である。

【四六七】 わ わい 念を推して餘情を云うもの、

銀行が年々殖えるわ。會社も出來るわ。腹が減るわ、寒くなるわ。取られるわ。行かせるわ。見込わ立たないわ。十分に來出たわ。みんな濟んだわ。

遊へばとて、程があるわな。なんでもよいわさ。」などと、「わ」の下に「な」(五五四)「さ」(三五九)などを伴うこともある。

旨く云うわい。やかましいわい。いまいましいわい。憎い奴だわい。

又「ここだわえ」と云うように、「わえ」と云うこともある。

日本書紀、仁賢紀、弱草吾夫恠。

【四五八】……【四六七】 第二類の助詞 ものを ものか ことを もんか ようわ わい

平安朝時代

伊勢物語、　さるさがなき夷心を見ては、いかゞはせむは。

源氏物語、夕顔、　夜中も過ぎにけむかし、風あら〳〵しう吹きたるは。

拾遺集、六、　君が住む、宿の梢を、ゆく〳〵と、隱るゝまでに、顧みしはや。

室町時代

狂言記、聟貫、　父樣、何しに往にませうぞ、おう、したらゐいわ。　同、宗論、　身にも笠にもつくやうにいやがるわ。「またどれへやら行くわ。」春園に、芋を植るわ。　同、見物左衞門、　刀、云々、持たねばさしませぬは。　同、拔殼、　行きまするわいの。

江戸時代

醒睡笑、二、　われは、日本一の事をたくみだいたわ、といふ。

日本永代藏、二、天狗は家名の水車、　よい事を思ひ出してゐたから、忘れたは。

○「四一九」にも「わ」がある、

第二

【四六九】

たつて	たつても	「たつて」「たつても」わ、「三七九」にもあり、「だつて」が

【四六九】 たつて　たつても　「たつて」「たつても」わ、「三七九」にもあり、「だつて」が「五一九」にもあつて、紛れやすい。

【四七二】 たら　だら　動作が過去であるのを、假に定めて云うもの、下に「ば」を添えて云うが正則であるが、今わ、全國ともに、多くわ省いて云う。

書いたらば讀もう。　擊つたら響こう。

遊んだらば歸れ。　讀んだら分ろう。

聞かれたら言おう。　逢わせたら話そう。

【四七三】 既に定まつた意味に云うもの、

昨日尋ねたら居なかつた。　相談したら得心した。　讀んだら分つた。

○「たら」の「だら」ともなる事わ、「一〇三」に云つてある。

【四七五】 指定の助動詞の「だ」の下でわ、「だつたら」となる、「であつたら」の約まるのである。

今年わ、豐年だつたら、祝いをしよう。　生れるが子が、男だつたら、大喜びであろう。

○前の指定の助動詞の「だ」の所を見よ。

【四六九】……【四七五】 第二類の助詞　たつて　たつても　たら　だら

○「たら」わ、文語の「たら」たり」たり」たる」たれ」と活用する過去の助動詞の將然形である、此語の事わ、前の過去の助動詞の「た」の所に、委しく說いて置いた。

○「たら」だら」の下に「ば」を略する事も、隨分古くから見える。

室町時代

閑吟集、　いとおしいといふたら、かなはふず事か、明日、又、讃岐へくだる人哉。

狂言記、聟貫、　何しに往にませうぞ、おう、したらゐいわ。

江戸時代

醒睡笑、七、　造作もなく、家の端（はた）にひとりねする處を、つけたらよからう。

古今夷曲集、八、　さいまつと、いひてくれける、雪の魚、くひたら味の、きえぎえとせん。（歳末に鱈を贈られた返し）

後撰夷曲集、九、　たてかねし、竈を見たら、地獄なる、鬼の目にもや、泪ながさん。

諸國盆踊唱歌、大和、　梅と櫻と、よしのへいたら、梅はすいとて、もどされた。

同、河内、　こなたおもふたら、これほどやせた、ふたへまはりが、みへまはる。

る。

ト養狂歌集、下、　つばき〳〵、さかづきなりに、ひらいたら、さけをすいせん、
　梅のはなのみ。

懐硯、三、水浴せば涙川、　あの男に逢つたら、女房を持せて置くさへ腹立つ、
　餘り見苦しき有樣、云々、

雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭、　唐辛を、云々、手にもぬつたらば、よかんべいが、
　とつぱづして、目なんどいぢつたら、目玉ががひにうづくべいぞ。

【四七七】　たり　だり　動作を並べて云う、文語の過去の助動詞の「たり」の中止形、連用形、終止形である、けれども、用法が少し變つて居るから、助詞とした、其語原の事わ、前の助動詞の「た」の所で説いておいた、「たり」の「だり」ともなることわ、「一〇三」に云つてある。

中止形のように用いるものわ、

書いたり讀んだり、いそがしい。　飛んだり跳ねたり、騒いで居る。

一つあつたり、又、二つも三つもあることがある。

擊たれたり、蹴られたり、えらい目に逢つた。　讀ませたり書かせたり、頻と、

同、河内、　こなたおもふたら、これほどやせた、ふたへまはりが、みへまは

教える。

長かつたり短かかつたり、不揃である。見たり見なかつたり、きまりがない。

連用形のように用いるものわ。

立つたり坐わつたりする。見たり聞いたりいたして居ります。書物を讀んだりして居る。雨が降つたりして物が乾かぬ。

終止形のように用いるものわ、

似たり寄つたりである。踏んだり蹴たり、とわ此事だ。讀んだり書いたりなどして居る。役目わあがつたりさ。聞いたり聞かなかつたり、これわしたり、おつときたり、

命令の意味に用いるものわ、

さあ起きたり〳〵。おつと待つたり。しつかり讀んだり。

熟語に用いるものわ、

したり顔、得たりかしこし、

鎌倉時代

平家物語、十一、能登嚴最後の事、人々、よろひのうへに、おもき物を、おふた

平家物語、十一、能登嚴最後の事、　人々、よろひのうへに、おもき物を、おふたりいだひたりしていればこそしづめ、此人おや子は、さもし給はず。

室町時代

幸若、富樫、　戸樫が若黨百人ばかり、ならび居て、墓目くつたり、矢はいだり、碁將棋雙六に心入れたる所もあり。

史記抄、六、一五　相經ト云ハ、人ヲ相シタリナンドスル經ゾ。　同、十、七一　日本ニ兵庫御所ト云タリ、富士下向ノ時ハ、東海道ニ、國々ニ、御所ヲ立タリ、伊勢海道ニ、宿所ヲ御所ト云樣ニ、巡狩ノタメト云テ、秦帝ノ宮ヲ作リヲクゾ。　同十一、四一　其ヲ本ニシテ、サセタリナンドモセヌホドニ、

同、六、二ヨイ者ノ、殺サレタリナンドシタルアトヲ、封ジタリ、修シタリナンドスルゾ。　同、十三、五八　車ニモノリ、馬ニモノツタリ、カチヨリ行タリ、ナンドシテ、

狂言記、鬼の槌、　御姿が見えたり、見えなんだり致すが、何とも合點のまゐらぬ事でござる。

江戸時代

【四七七】　第二類の助詞　たり　だり

西翁十百韻、戀、俳諧、起たり寐たり、空ながめたり。

【四八〇】 だつたり わ、「であつたり」の約まつたのである。

晴れだつたり、降りだつたり、不定の天氣だ。

色が赤だつたり、白だつたり、目にちらつく。

【四八二】 つゝ 「四二四」の「ながら」(であるけれども)の意味のもので、文語の「見つゝ寫す」など、二つの動作を同時に行うを云う「つゝ」から移つて、意味が變わつたものであろう。

小言を聞きつゝ、氣をつけぬ。 見張をしつゝ、盜まれた。

【四八三】 て で

これわ、前の過去の助動詞の「た」の活用で、その中止形、連用形であろう、けれども、過去の意味がなくて用いられるのが多いと云うことで、助詞とせられたと云う事わ、其所で說いておいた、けれども、「た」の活用に立てゝ、過去の意のないのを、附屬とした方がよい、とも思われるが、先わ、助詞としておく。

【四八四】 同じ時の事柄を、續けて云うときに、その間におくもの、これは、連用形のように用いるものに多い。

形のように用いるものに多い。

連用形のように用いるものわ、

立てて‖ある。　似て‖居る。　殘つて‖居る。　泣いて‖來る。　讀んで‖しまう。　飛んで‖行く。

逐われて‖逃げる。　讀ませて‖聞く。　行かなくて‖ならない。　見たくて‖行く。

あるいて‖わ行かぬ。　讀んで‖も居ない。　字に書いて‖ばかりある。　寐て‖ほか居ない。

太くて‖短かい。　痛くて‖痒い。　おかしくて、こらえられぬ。

細くて‖わ、役にたゝぬ。　日が長くて‖こそ、仕事がはかどるのである。

○形容詞の第一活用に附いて「太くて」痛くて」など云うわ「くあつて」を略したものであろうと云うことわ「一五五」で云つておいた。

【四八五】ちがつた事柄を、たゞ續けて云うときに、その間におくもの、これわ、中止形のように用いるものに多い。

中止形のように用いるものわ、

川を隔てて‖、花を見る。　喉を抑えて‖、背を打つ。　馬に乘つて‖、運動する。

【四八四】同じ時の事柄を、續けて云うときに、その間におくもの、これは、連用

【四八七】 これわ、慥に、動作有樣の、別々なものゝ間に這入つて居て、過去の意を含んで居る。

中止形のように用いるものわ、

墨を摺つて、字を書く。 書物を讀んで、道理を知る。 朝に起きて、顔を洗つて、飯を食う。

夜の明けるのが早くて、日の暮れるのが遲い。

連用形のように用いるものわ、

聞いて知る。 書いて置く。 嚙んで食う。 持つて來て見せろ。

「歸つての後、行つてと賴む。」見てから始める。」死んでまで恥となる。」見てもよい。」讀んでも見ぬ。」明けてさえ見ぬ。」見てでなければきめられぬ。」書いてなどして、」見てやら見ないでやら分らぬ。」見てか見ないでか。」などゝも用いる。

【四八九】 「ながら」「のに」の意味で、上下の句をつなぐもの、

知つて居てしない。 見て見ぬ振をする。 年が若くて、これほどの仕事をする。

○「四四三」に「て」があり、「三七〇」「五二〇」にも「で」がある。

【四九〇】 この「ても」でも」わ、「四八九」の「ながら」の「に」の意の「て」に、「四一一」の假りに

【四九〇】 この「ても」でも」わ「四八九」の「ながら」のに」の意の「て」に「四一一」の假りに設けて云う意味の「も」がついたのである。

無いと云つても、少しわある。 研いでも切れぬ。 讀んでも覺えない。

讀ませても分らぬ。 見ないでも、見たと認める。

國わ大きくても、産物わ少ない。 いくら長くても、そのまゝつかう。

第三

【四九八】 ところが くひちがう意味の句を結びつけるもの、

人が來た所が、一人か二人だ。 金を溜めた所が、死ぬ時わ置いて行くのだ。

望んだ所が、及びもない。

【五〇〇】 上下の句を結びつけるもの、

見廻した所が、人わ居なかつた。 考えて居た所が、寢られなかつた。

第四

【五〇三】 ば 上の動作事情の、下の事の起りとなるを、假に定めて云うもの、

死ねば恨みわなかろう。 食へば味が分る。 言えばわるかろう。 時過ければ、間に合わぬ。 蹴れば倒れる。 勉強すれば、學問が進もう。

【四八七】・・・【五〇三】 第二類の助詞 て で ところがば 三八三

○「四四三」に「て」があり、「三七〇」「五二〇」にも「で」がある。

長ければ切ろう。　無ければ、それでよい。
譽められゝば、嬉しく思う。　讀ませれば分ろう。　行かねばならぬ。　來なければ、呼びにやれ。　見たければ見ろ。　晴れたらば出かけよう。　遊んだらば稼げ。

右の五段活用の動詞、形容詞、幷に助動詞の「ぬ」「ない」「たい」などわ、稀に、次のようにも用いられる。

死なばもろともに、　毒食わば皿まで、　言わば狂氣の沙汰だ。　地球の形わ、申さば橙のようで、　殺さば殺せ。　立寄らば大木の蔭、　見えも飾もあらばこそ。

長くば切ろう。　無くばそれでよろしい。
行かずばなるまい。　來なくば、呼びにやれ。　見たくば見ろ。

是れわ、文語の姿の殘つて居るので、文語では、これが假定の意味で、「五〇八」のわ既定の意味であるが、口語では、兩方ともに、假定に用いるのである。

【五〇四】

讀めば讀むほど面白い。

【五〇五】　これわ、假定にも既定にも解せられる、「五〇八」をみよ。

【五〇五】これわ、假定にも既定にも解せられる、「五〇八」をみよ。

親があれば、子がある。先生が居れば、座がしずまる。

嬉しければ笑い、悲しければ泣く。

【五〇六】事の、一處に落合ふ意を云うもの、「四四六」の「と」と同じである。

夜が明ければ客が來るし、日が暮れゝば取調物となる。寄ればさわれば噂する。

【五〇七】「も」に伴つて、動作事情を並べて云うもの、

飯も食えば、茶も飲む。英語も出來れば、獨逸語も出來る。

聲もよければ、節もうまい。丈も長ければ、幅も廣い。

金も得られゝば、名譽も得られる。本も讀ませれば、字も書かせる。見もせねば、聞きもせぬ。煙草も吸わなければ、酒も飲まない。場處も見たければ、演說も聞きたい。

【五〇八】既に定まつた條件を云うときに用いるもの、

思えば〳〵悔やしい。一人がよいと云えば、一人がわるいと云う。よく考えれば、そうでもない。見れば、まだ、年の若い人だ。

讀めば讀むほど面白い。

「昨日尋ねたらば」居なかつた。」讀んだらば」分つた。」(四七三)なども、文語の假定のものを、口語に、既定に用いるのである。

【五〇九】「に因て、」又わ「から」の意のもの、みんなでした事であれば」一人の手柄でわない。長ければ」こそ、切るのである。來なければ」こそ、呼ぶのです。見たれば」話されるのだ。けれども、是等わ、今わ、多く用いないて、「あるから」長いから」來ないから」見たから」など、云う。

以上の事わ、前の動詞、形容詞、助動詞の活用の、それ〴〵の條々にも、委しく說いておいた。

○「四一九」の「わ」の、「ば」となることもある。

第三類の助詞

【五一二】 え 方角を示すもの、文語の「へ」の、母韻ばかりとなつたので、次の二項のも、これが移つたのである。

長崎え」送る。 北え」向う。 前え」進む。 遠くえ」遣る。 近くえ」引越す。

長崎え‖送る。　北え‖向う。　前え‖進む。　遠くえ‖遣る。　近くえ‖引越す。
前ばかりえ‖出す。　京都だけえ‖送る。　どこかえ‖やろう。
南え‖わ向かぬ。　西え‖も行く。　うしろえ‖ばかりそりかえる。　前え‖ほか進まぬ。　どちらえ‖か向けよう。
「東え‖の路」名古屋え‖と出立する」など云うわ、語を略したのである。

【五一三】　場所を示すもの、文語の「に」(五三七)の場合で、次項のものも同じである。

舟え‖乗る。　山え‖のぼる。　机え‖載せる。　疊の上え‖すえる。　遠くえ‖置く。
近くえ‖住わせる。
上と下とえ‖すえる。　棚ばかりえ‖載せる。　椽だけえ‖あがらせる。　どこかえ‖置こう。
膳え‖わ供えぬ。　上座え‖もすえぬ。　椽え‖ほかあげない。　どこえ‖か置く。
二階え‖ぐらいわ、あがられよう。
文語にわ、方角わ「へ」で、場所わ「に」(方角にも)と定まつて居る、しかし、場所に「へ」を用いるようになつたのも、隨分古くから見える。

【五〇九】…【五一三】　第三類の助詞　え

項のも、これが移つたのである。

平安朝時代

寶物集、中、　一日一夜なりとも、惡道へ‖おとし給ふ事なかれ。

室町時代

幸若、未來記、　大慢心を起す故、佛には成らずして、天狗道へ‖落つるなり、たとへ、慢心多くして、この道へ‖落つるとも、情をいかで知らざるべき。　同、

烏帽子折、　きやつばらは、椽の下へ‖隱れうず。

史記抄、十、七九　木へ‖上テ、ヲリウカ、上ラウカ、ト二端ノ心ノアルモノヂャゾ。

【五一四】「五三九」の相手を示すもの、事情の落ちつく所を示すもの〻「に」の意味のもの、

財産を、子え‖讓る。　疑いを、學者え‖たずねる。　月謝を、先生え‖あげる。　仕事を、來年え‖まわす。　金を、來月え‖繰越す。

友達だけえ‖相談する。　誰やらえ‖やつた。　兄と弟とえ‖くれる。　どこかえ‖附く。

兵卒え‖まで下さる。　友達え‖だけ相談する。　誰え‖やら遣つた。

○感動の意の助詞の「え、」(五六一)感動詞の「え」(五七六)もある。

兵卒え‖まで下さる。　友達え‖だけ相談する。　誰え‖やら遣つた。

○感動の意の助詞の「え」(五六一)感動詞の「え」(五七六)もある。

【五一五】 が 「三五三」の主語を示す「が」と同じであるが、承ける語の意味で、少し違うのである。「五四九」の「を」のように思われる。

字が‖書けぬ。　酒が‖飲めない。　學問が‖好きです。　行末が‖案じられる。

○「三五三」「四三〇」にも「が」がある。

【五一六】 して 由來を示すもの、

心が變わつたかして‖、出て來ない。　省いたからして‖、見えない。　それから

して‖、こうなつた。

「三九三」の「にして」も同じ意味である。

「五二二」の「で」に似たもの、

獨りして‖する。　兄弟して‖出掛ける。　三人ばかりして‖來る。　五人して‖引張る。

○此の外「そうして‖」「どうして‖」「暫くして‖」のように、副詞にもつく。

○「手を出したりして‖居る。」それわよいとして‖、外の事をしろ。」どうぞして‖、そうしたい。」などわ「する」と云う動詞の活用である。

【五一四】……【五一六】 第三類の助詞 え が して

○「月と、そうして、花、」などわ、接續詞である。

【五一九】 だつて 「だとても」の約略で、下に「も」をつけても云う、これわ、東京方言かと思つて、舊案にわ、擧げて置かなかつた。

雨降りだつても出掛ける。 それだつて、おまえ、どうなるものか。

今からだつても、遲くわない。 こればかりだつて、取つて置きなさい。

「少しだつて、志だ。」いやだつて、おたべなさい。」僅かだつてよろしい。」などゝ、副詞、又、副詞の語根にも附く。

「それだつて」を略して、「だつて」と、獨立に、接續詞につかうことがある。

「今日わ、休みだつて、來ませぬ。」いやだつて、たべない。」などわ、「だと云つて」の約で、意味が違う、(下に、「も」がつかぬ、)是れも、東京方言であろう。

○「三七九」「四六九」の「たつて」と紛れやすい。

【五二一】 で 動作の行はれる場所を示すもの、「に於て」の意である。

座敷で話す。 東京で賣捌く。 朝鮮で流行する。 遠くで見て居る。 近くで聞く。

上海だけで賣れる。 長崎やらで取引する。 どこかで見た。

家の内での事、 瘦地でわ成長せぬ。 大阪でも神戸でも、賣り買いする。

家の内での事、 瘦地でわ成長せぬ。 大阪でも神戸でも、賣り買いする。
關東でばかり行われる。 北海道でほか賣れぬ。 都ででも見かけない。
天津でやら北京でやら發行した。 魚を捕つたわ、海でか川でか。
時にも云う。
朝と晩とで、景色が違う。 三日か四日で出來る。 六時までで仕舞う。

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、 げんざんするうへでは、いかでこゑをもきかで有べき、まづ、いまやう一つ、うたへかし。」こんじやうで、物をおもはするだにあるに、後生でさへ、あくだうへ、おもむかんずる事のかなしさよ。 同、四、大庭がはや馬の事、 由井こつぼのうらで、せめたゝかふ。 同、六、めぐらし文の事、 義仲、云々、十三で元服したりしにも、 同、十、せんじゆ、 伊豆のくにのものにて候へば、鎌倉では、たびにて候へども、

室町時代

史記抄、四、九 十人ノ中デ、二人ヅヽ、用ニモ立ツベイ物ヲ擇デ、 同、十、三五
此以下一段ハ、楚デノ事ゾ。 同、十、三九 コヽデ殺サイデハ、

【五一九】……【五二一】 第三類の助詞 だつて で

孟子抄、一、三　五經ノ中デモ、毛詩、尙書ヲ得タゾ。　同、一、一七　王者ノ上デハ、仁義ヲ本ニセラレ候へ。　同、一、二八　其内デ、スグレタガ、此三人ゾ。

狂言記、宗論、　其方の宗體を、世間で、情が强いといふ。」いかさま、どこやらで、聞いたやうな。　同、相合袴、　それは、どこにござりまするぞ、いや、表にでござる。　同、鞍馬參、　内で使ふが足らいで、外でまで、不寢の番をせいと云はるゝ。　同、舟ふな、　浦で、網を引かせられうと、又、山で狩をなされうとも、

詠歌之大概、　中流デ、楫をすつれば、云々、もとの剡溪へカヘル。

伊曾保物語、　なまぬるい湯を、云々、主人の前で飲み、

江戸時代

醒睡笑、一、　娑婆で見た彌次郎か。

犬子集、十七、　山中で、落いたかねや、尋ぬらん。」行旅の、道で夢みの、わろくして。

油糟、雜、　關でむかふる、望月の駒。」後生でも、持病の虫や、おこるらん。

新增犬筑波集、雜、　乘つけぬ、馬に神主、のけぞりて、あの宮でだう、此みやで

だう。

だう。

正章千句、三、　他國の空で‖花をまつ春。

吾吟我集、七、　手こうより、目こう成けり、亂れ碁の、あやまりは猶、そば‖見へぬる。

【五二二】 動作をする方法を示すもの「を以て」の意、

墨で‖塗る。　木で‖造る。　謀で‖勝つ。　汽車で‖行く。　自轉車で‖走る。　本氣で‖考える。

右と左とで‖持つ。　木ばかりで‖こしらえる。　ある物だけで‖、間に合わせる。

酒やら肴やらで‖もてなす。　藍か黄かで‖染める。

自身で‖の挨拶、　金銀で‖まで飾立てる。　淺い智慧で‖わ出來ぬ。　女の手で‖も、子供の手で‖も運ばれる。　水で‖ばかりわ凌がれぬ。　水で‖ほか融かされぬ。　船で‖やら送つた。　藍で‖なり黄で‖なり染めよう。

鎌倉時代

平家物語、二、西光がきられの事、　義勢ばかりで‖、このむほん、かなふべしとも見えざりければ、　同、四、競の事、　鷹の羽で‖、はひだりけるまと矢一手

ぞ、さしそへたる。」競めをいけどりにせよ、のこぎりでくびきらん。　同、大庭が早馬の事、　畠山、五百よきで、みかたをつかまつる。

古今著聞集、五、　かみやがみに、たてぶみで、使にかへしたびて、

室町時代

史記抄、六、三一　勇悍バカリデ、人ハ服セマイゾ。　同、十、六二　五羖羊皮デ購テ、　同、十、六九　柘木ヤ竹デ作タ弓ゾ。　同、十一、三六　ヨキマサカリデキルゾ。

孟子抄、一、二七　田横ハ、項羽方デ、五百人デ、一島ヲコシラヘテ、コモテイテ、（籠リテ居テ）　同、一、二八　衞鞅ヲ大將デ、魏ヲ打タゾ。

狂言記、相合袴、　連舞（つれまひ）でなければなりませぬ。　同、釣狐、　狐、云々、此罠でひつしめて、　同、粟田口、　書いた物、云々、眞（しん）で書いてあるに依て讀めぬ。

同、舟ふな、　古歌穿鑿を致いて、ふねと申古歌に、ほふと詰つた、いや、謠でつめうと存ずる。　同、伯母が酒、　其甘いをすく衆へは、甘いで進じやうず。　同、酢薑、　皆、墨繪で書いてある。

江戸時代

醒睡笑、五、　ひやしるわんで、三盃、のめふと申した。　同、七、　かんきんした

醒睡笑、五、ひやしるわんで、三盃、のめふと申した。同、七、かんきんした手で、とらふかな。

犬子集、二、春、下、花の香を、はなで尋る、山路かな。酒よりも、せんじ茶で見よ、姥櫻。同、十七、古筆は、越後兎の、毛でゆひて、

油糟、春、正月の、餅で泣く子を、すかしかね。同、夏、竹の筒で、天をみるまも、夏の月。同、雜、あか土で、ふさぎにけらし、鼠穴。

新增犬筑波集、下、秋、すゝきの糸で、絹を織まね。同、冬、すあしで、庭火、燒うたふなり。同、雜、とがり矢で、名を、あげし振舞。

吾吟我集、四、冬、大海を、手で、せくごとし、ながれ行く、年月なゝみを、おしむ心は。

諸國盆踊唱歌、駿河、しつておれども、人にまたとふて、母のさしづで、むかいとれ。

西翁十百韻、西國にて、手拍子で、行く、三熊野の道。

○「五一六」の「して」を見合わせよ、「一人で、出掛ける。」獨りで、する。」などゝも云う。

【五二三】【五二四】動作の行われる緣由を云うもの、「に因て」に就て」の意。

【五二三】…【五二四】第三類の助詞で

人の慈悲でたすかる。他人の事で心配する。その事で、話しに來た。それで分つた。雨天でやめた。無學で出來ぬ。

雨と雪とで難儀する。見るや聞くやで學問する。書くやら讀むやらでいそがしい。議論や何かでやかましい。相談してでなければ、結着わつかない。

勉強での出來ばえ、人の事でまで心配する。子供の事でばかり苦勞する。

「金がないで困る。」日が長いで、仕事がはかどる。」などわ、形容詞に附き、「知らぬで氣がつかぬ。」時が後れたで、出かけなかつた。」行かないで、容子が知れぬ。」などゝ、助動詞にも附くが、「ので」と云うが、正しいのである。

鎌倉時代

平家物語、三、賴豪の事、かやうの御願は、吾山の力でこそ、成就する事では候へ。

室町時代

孟子抄、一、五　木德デ、王ニナツタ程ニ。

山崎宗鑑辭世、(天文中)　宗鑑は、いづくへいたと、問ふならば、用が出來たで、

山崎宗鑑辭世、(天文中)　宗鑑は、いづくへいたと、問ふならば、用が出來たで、
あの世へといへ。

狂言記、烏帽子折、　出たまでは、七五三飾、門松がなかつたが、今は、七五三飾
で、賴うだ御宿を忘れた。

江戸時代

醒睡笑、七、　船なしで、わたす瀨あらば、七夕に、かさばや天の、かはらけの駒。
油糟、雜、　乘馬も、よき鐙(あぶみ)で、や、いさむらん。
正章千句、二、花、　雨と露、ばかりで花が、ひらかふか。

○「三七○」「四四三」「四八三」「五二○」にも「で」がある。

【五二七】　指定の意味をあらわす、この「で」わ、「三七○」の「で」と同じもので、その中止形の用法であるが、用法に、區別があると云うので、二つに分けた。

【五二九】　でして　是れわ、「です」の中止形であろうと云うことわ、前の指定の助動詞の「です」の所で云つて置いた。

【五三○】　ので　ので　此「の」わ、「四五六」の「もの」こと」ところ」の意の「の」である。舊案にわ、「ので」わ、「のだ」の活用「のでして」わ、「のでした」の活用で、共に、其中止

形としてあつた。尙、前の指定の助動詞の「だ」「です」の所に說いてあるのを見よ。

雨が降るので困る。勉强するので、仕事がはかどる。

智慧がないので、何も出來ぬ。日が長いので退屈する。

擊たれるので逃げる。讀ませるので覺える。知らぬので、氣がつかぬ。

時が後れたので、出かけなかつた。

【五三一】次のように、副詞の語根につくこともある。

穩でも安心わ出來ぬ。暖でも風を引く。

○假に定めて云う「讀んでも分るまい。」などわ、「四九〇」に說き、「親類でもなく友達でもない。」などわ、「三七〇」の「で」に「も」の付いたものである。

○「四二一」にも、「でも」がある。

【五三三】 と 相手を指すもの「に對して」と共に」の意、

あなたと話す。仲間と申合わせる。獨見ようより、人と見よう。

親類ぐらいと相談する。家族だけと話合う。

相手との約束、

○「三七六」「四四四」「四四九」にも「と」がある。

○「三七六」「四四四」「四四九」にも「と」がある。

【五三四】 とも 是れわ、「共」の意で、「共に」を略したものである、用法の事わ「きり」ぎり」の條(三五五)に云つて置いた、「四四七」にも「とも」がある。

○「と共に」の意味の「梨の實を皮ごと食う。」箱ごと送れ。」風呂敷ぐるみ置いて行く。」入れ物ぐるみ進上する。」など云う助詞もある。

【五三七】 に 場所を示すもの、

書物を、机の上に置く。 都に住む。 朝鮮に渡る。 山に近い。 海に遠い。

東京と横濱とに居る。 どこかにあろう。

【五三八】 時を示すもの、

午前六時に起きる。 朝に早く立つ。 夜中に、風が吹いた。 一日に、十里行き、十日に、百里行く。 暇に用を足す。 藥を寢しなに飲む。

午後三時からにしよう。 五時までに來よう。

【五三九】 相手を示すもの、

人に、物をくれる。 疑いを、學者に尋ねる。 數學を、生徒に教える。

生徒が、先生に教えられる。 先生が、生徒に讀ませる。

【五三一】…【五三九】 第三類の助詞 と ともに

誰やらに話した。　誰かに逢おう。

【五四一】「に於て」に取つて」の意味で、外の事との區別を示すもの、

おまえに讀まれるか。　出かけるによい日和だ。

【五四二】「に就て」の意味で事の起りを示すもの、

聞かれるに困る。　痛いに苦しむ。

【五四三】轉化の意味を示すもの、

水を湯にする。　櫻も青葉になる。　雪を花に見立てる。

【五四四】「として」の意味のもの、

本尊に釋迦の像をすえる。

【五四六】物を、一つ〳〵に數えるもの「三七六」の「と」のような意味である。

子供に女に年寄が居る。

○「に」わ、本書に委しく分類してあるが、なお、次のようなものがある。

○物に添わる意味のもの、

月に叢雲、花に風雨、　梅に鶯、竹に虎、　敵が一人に、身方が五人、

「藝が上手だに、學問がよいに、辯がさわやかだ。」など〳〵も用いる。

○「に因て」の爲に」の意味で、事の目當を示すもの、

○「に因て」の爲に」の意味で、事の目當を示すもの、
病に‖惱む。人手に‖死ぬ。
○種々の語に附けて、副詞を形作らせるもの、
殊の外に‖手間取る。ありのまゝに‖言う。いろ〳〵に‖思う。美事に‖出來る。無事に‖暮す。遠慮なしに‖言う。仕方なしに‖する。寢ずに‖居る。
○「三九一」「四五一」にも「に」がある。

【五四八】 の 上の語に附いて、下の語を形容するもの、
櫻の‖花、松の‖枝、都の‖人、田舍の‖女、子の‖心、武士の‖情、劍術の‖達人、法律の‖學、鹿毛の‖馬、弱年の‖教師、淡泊の‖心、發明の‖人、美事の‖品、樹木の‖成長、
行つての‖後、以ての‖外の事、行けとの‖命令、どこかの‖人、
「長の‖旅」「我面白の‖人困らせ」などゝ、形容詞の語根にも附き、「ちよつとの‖暇」「暫くの‖間」「多くの‖人」「聊かの‖事」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附き、「遠慮なしの‖交」「見ず知らずの‖人」など、句にも附く。
○持主を示すもの、

【五四一】……【五四八】 第三類の助詞 に の

君の‖御世、父の‖財産、人の‖もの、
○唯、名詞と名詞とを繋ぐもの、
世の‖中、山の‖下、大塔の‖宮、平の‖清盛、書物の‖三冊目、
○「で出來て居る」の意味のもの、
金の‖時計、木綿の‖着物、
○「の作つた」の意味のもの、
貫之の‖歌、正宗の‖刀、馬琴の‖八犬傳、
○「と云う」の意味のもの、
富士の‖山、壹岐の‖島、守屋の‖大臣、春日の‖局、
○「にある」の意味のもの、
京都の‖東山、武藏の‖隅田川、故郷の‖父、松の‖雪、
○「に於て」の意味のもの、
宇治川の‖先陣、奉天の‖戰、
○「である」の意味のもの、
忠臣の‖正成、貞女の‖袈裟、無實の‖罪、高慢の‖鼻、

○「のような」の意味のもの、

○「のような」の意味のもの、

露の‖命、夢の‖世の中、花の‖都、昔の‖心持、

【五四九】下の名詞を略して、名詞のように用いるもの、

あなたの筆も、私の‖も、こゝにあります。此品わ、人の‖である。誰の‖が、一番よいか。私の‖から出します。自分の‖だけ取る。

平安朝時代

土佐日記、今のあるじも、さきの‖も、手取りかはして、

源氏物語、葵、唐の‖も、やまとの‖も、書きけがし、(紙のことを云う)

鎌倉時代

宇治拾遺物語、二、一一　左京のさくわんの主の‖也、といひつれば、

室町時代

狂言記、宗論、今の‖が法文ぢや、其方が耳には入らぬか。

江戸時代

醒睡笑、四、かたあし、人の‖よりもながいといふた。

【五五〇】主語を指して、連體形の語に續くもの、

風の‖吹く日、　日の‖暮れる頃、　雨の‖降らぬ時、　色の‖白い人、　路の‖嶮しい坂、

○「三九四」「四五六」「五五六」にも「の」がある。

【五五一】 を 他動の動作のかゝるものを示すもの、

花を‖採る。　枝を‖折る。　紙を‖裂く。　矢を‖射る。

月と花とを‖眺める。　五人までを‖限りとする。　故郷ばかりを‖思つて居る。」

「人の行くを‖とめる。」客の來るを‖待つ。」寒いを‖恐れる。」ねむいを‖こらえる。」打たれるを‖防ぐ。」讀ませるを‖聞く。」讀んだを‖忘れた。」勉強の出來ぬを‖苦にする。」など、用言にも附く「のを」を略するのであろうか。

○自動にかゝつて「から」の意味のもの、

家を‖出る。　境を‖離れる。　國を‖去る。　位を‖退く。

○自動の動作の行われる場所、又わ、動作の事情の及ぶところを示すもの、

國を‖巡る。　路を‖あるく。　門を‖過ぎる。　空を‖飛ぶ。　天を‖仰ぐ。　右を‖向く。

崖を‖つたつて行く。

山と川とを‖越える。

「雲を‖霞と逃げる。」など云うこともある。

「雲を霞と逃げる。」など云うこともある。

第四類の助詞

第一

【五五四】 な　なあ　念を推す餘情を云うもの、

もう花が咲くな。　軍隊が行軍するな。　兵卒がたいそう來るなあ。

天氣が怪しいな。　これわひどいな。　うれしいな。　面白しいなあ。

客が歡迎されるな。　ちつとも見えないなあ。　もう行つたな。　善く出來たな。　行きたいなあ。　行くまいなあ。　敵わ一人だな。

風が吹くからなあ。　行つてしまつたかなあ。

「はてな」、など、感動詞にも附き、「ほんとうになあ」、など、副詞にも附く。

狂言記、花子、　寺々の鐘つく奴は憎いな。　同、萩大名、　是は聞き及うだよりは、打開いた景のよい庭ぢやなあ。

○物言いかける意を含むもの、

おまえわ、毎日行くな。　いつしよに見ようなあ。　何か下さいな。

山と川とを越える。

だいぶ早いな。‖ 評判がよいな。‖
たいそう褒められるな。‖ こまりますなあ。‖ 何もござりませぬなあ。‖ 妙ですなあ。‖ 行かないな。‖ 行くまいな。‖ 何とかおつしやいな。‖ 行つたろうな。‖ 行くだろうな。‖
支度わよいかな。‖ そうですからなあ。‖
「待ちなな。‖」などわ、命令の「待ちなさい」の略に附くので「こゝにあるわな」‖などと、「わ」(四六七)にもつく。
狂言記、釣り女、 いかう早う來たな。‖ 同、抜殼、 いかう醉うたかな。‖
○「一三二」「一六七」「三〇三」にも「な」がある、「五八二」の感動詞の「なあ」わ、こゝの「な」「なあ」と同じものであるけれども、言葉の上(かな)につかうのを感動詞とし、下(しも)につかうのを助詞として、唯、用法で分けたので、次の「ね」「ねえ」も同じことである。

【五五五】 ねえ 念を推して、物言いかける意のもの、

花が咲くね。‖ よく出來るねえ。‖
うつくしいね。‖ おもしろいねえ。‖

呼ばれるね。‖ 書かせるね。‖ じきに出來たね。‖ 出來ないねえ。‖ 行くまい

うつくしいね。　おもしろいねえ。

呼ばれるね。　書かせるね。　じきに出來たね。　出來ないねえ。　行くまいね。　行きたいねえ。　これだね。

「そうしてね、きのうわね、あの人がね、すぐに行つたらね、譯が分かつたのさ。」はあ、そうかね。」おかしい事ねえ。」少しね、困まつたよ。」などゝ、すべての場合に附く、全く、間投詞(感動詞)である。感動詞の(五八三)の「ね」ねえ」を合せ見よ、用法に因て區別したと云うことわ「五五四」に云つて置いた。

【五五六】 の　のう　是れわ、人に物言いかける餘情を云うものである。

旨く出來るの。　よく讀むのう。　物覺えがよいの。

頻りと褒められるの。　恐しい顔だのう。

中がよいことだの。　よい元氣だのう。　まだ見まいのう。　よかつたのう。

よく出來たのう。

わたしが行くからの。　そうしての、けさの、行つたらの、人が來て居ての、逢わなかつた。

室町時代

謠曲、卒都婆小町、　小町がもとへ通はうよ、のう。

【五五五】【五五六】 第四類の助詞　ね　ねえ　の　のう

狂言記、釣狐、　其狐を釣る物を、ちと見たいの。　同、どぶかつちり、　おのれは憎い奴の。

○「三九四」「四五六」「五四七」にも「の」がある。

【五五七】　まゝ　文語の「まに〳〵」が、「まゝに」となり、又「まゝ」となつたものであろう。

出すまゝ受取る。　出て行つたまゝ歸らぬ。　そのまゝ用いる。

「我がまゝがつのる。」したいまゝにさせておく。」どうなろうとまゝよ。」などわ、名詞のようになる。

【五五九】　よ　念を推して云い聞かせる意の「ぞ」(四四〇)の輕いものである。

澤山あるよ。　花も散ろうよ。　待てよ。　くれろよ。　お讀みよ。　下さいよ。

これがよいよ。　それわひどいよ。

行けば逢われるよ。　花わ散つたよ。　行きたいよ。　知らないよ。　ありますよ。　ありませぬよ。　ありましょうよ。　ごらんなさいよ。　これだよ。

婦女子の言葉に「ごらんなさいよう。」下さいよう。」おやめよう。」など云うわ、強いる意がある。

「こう云うものよ。」知れた事よ。」その通りよ。」など、名詞にも附き、(上に「だ」を略

「こう云うものよ」「知れた事よ」「その通りよ」などゝ、名詞にも附き、(上に「だ」を略したのであろう)「そうよ」「こうよ」などゝ、副詞にも附き、「字を書くのよ」など、助詞にも附く。

室町時代

孟子抄、一、三〇　他國モ道ガナイヨ、政道ガ惡イゾ。　同、一、三一　五六月ノ間、旱魃甚キ時ニ、必、苗ガ枯ルヽヨ。　同、七、一〇　人ト云ハ身ゾ、身ノ本ハ何ゾ、一心ヂヤヨ、心王ヲ指ゾ。　同、七、一三　人ゴトニ、敵ヲモタウトハセヌヨ。　同、七、二三　昔ノ道ハ、今ハ入ラヌ、ト心得タヨ。

狂言記、伯母が酒、　お見やる通り、妾(わらは)も、異なる事もおりないよ。　同、見物左衞門、　礫、云々、そちが投(う)つたらば、此方からも參らせうまでよ。　同、連歌毘沙門、　其連歌を、今一度聞きたいよ。　同、柿山伏、　腰のぬけたを連れていて、養生せう子細がないよ。　同附子、　ゆるりと居て話さうよ。

江戸時代

醒睡笑、一、　きやつを馬の丞とつけたれば、いさみて、はや、いないたよ。

同、七、　かつゑ死なうかと思ひ、ふびんさに泣いたよ。

【五五七】【五五九】第四類の助詞　まゝ　よ

○上一段、下一段、サ行變格活用の動詞、受身、使役、敬讓の助動詞等の命令形を形作らせる「よ」もある。

第二

【五六一】 え 念を推す意のもの、多くわ問いかけるに云う。

是れわ、なんですえ。 それわ、なんだえ。 直段わ、いくらだえ。

御丈夫かえ。 來られますかえ。 そうかえ。 行くのかえ。 行つたとえ。

これだとえ。

此の「だえ」かえ」を、「だい」かい」と云うこともある。

「どこえ行くえ、」だまつて居ろえ、」などゝ、動詞に附き、「そんな事を云うなえ、」などゝ用いる事もある。

「鈴木さんえ、」梅子さんえ、」などゝ呼びかけるにも用いる。

西鶴置土産、四、江戸の小主人と京の唐土(もろこし)と、 我等が男は、上方にて、無事かへ。

○「五一一」にも「え」がある。